

代替医療、O-リングテスト、キネシオロジー、カイロプラクティック、整体療法、
韓医学、アーユルヴェーダー、ユナニ医学について

30年もの間、病気は自分の免疫で治す以外に方法はないという真実に基づいて開業し、その真実と証拠を開示するためにこのようなホームページを作り続けています。難病は患者の免疫を抑えることによって患者自身が作り、追い討ちをかけるように医者がさらに患者の免疫を抑えて病気が難病になっていきます。どの病院に行っても免疫を抑える限りは治る訳はないのですが、最後に私を見つけ、遠方から受診される人の中にO-リングテストで診断されて、色々漢方や現代医療を併用してこられた患者がたくさんおられました。言うまでもなくO-リングと免疫の関係は何一つないのは明々白々であります。近頃そのような患者が多くなったので、O-リングテストに解説する気になりました。例のごとくWikipediaからコピペしながら話を進めましょう。その前にO-リングテストも代替医療のひとつになっているので、まず代替医療について批判しながら、最後にはO-リングテストが全く意味のない医療であることをも説明しましょう。まず何よりも知ってもらいたいのは、生命が38億年かかって進化できたのはなぜなのかを知ってもらいたいのです。生命が38億年間生き延びることができたからです。全ての生命は様々な病気にかかったのですが、死に絶えることがなかったからです。確かに恐竜は6500万年前に忽然と地球上から消え去りました。しかしながら病気のために絶滅した訳ではありません。他のあらゆる生命が生き続けたのは、病気を自分の免疫の遺伝子で治したからです。免疫の遺伝子こそが最高の名医であり、免疫の遺伝子が作らせたタンパク質が最高の薬であったからです。それでは病気とは何でしょうか？

常に私が言っているように、人体に侵入した異物を免疫が処理する時に病気が生じます。免疫はその異物を特定し、その異物を正しく処理するために病気を引き起こし、最後に全ての病気を治せるのは、38億年かかって進化してきた人間の免疫の遺伝子だけです。従って正しい医療・正しい医学はただ一つ、患者の免疫の遺伝子を手助けする医療・医学であります。世界中の医者は自分が病気を治したような顔をし、世界中の製薬メーカーも自分たちが作り出した薬が病気を治したような顔を宣伝しまくっていますが、実はワクチンと抗生物質しか免疫の遺伝子を手助けすることができなかったことを皆さん知っておいてください。それでは免疫の遺伝子はどんな仕事をしているのでしょうか？

免疫の遺伝子は正しく病気の原因を特定し、その原因を正しく処理して病気を治しているのです。このような免疫の遺伝子は38億年かかって徐々に完璧に作り上げ、全ての人間に親から子へと生まれながらに伝え続けたのです。異物の処理の仕方は4つしかありません。原因である異物を殺すか、体外に排除するか、共存するか、神経節に追いやるか、の4つであります。この4つの働きを実現させることが免疫の遺伝子の働きであり、この働きを手助けすることだけが医者の仕事なのです。この絶対不滅の真実から私は医療や医学や薬を批判しているのです。代替医療もO-リング医療についても、この観点から批判していきます。

以上をまとめると、一言で言えば、免疫の遺伝子は完璧であり、免疫の遺伝子を理解することや、その遺伝子の発現をヘルプすることは許されますが、絶対に遺伝子の働きを変えてはならないという真実であります。言い換えると、免疫の遺伝子を変える限りは絶対に病気は治らないということです。このような真実から離れた医療は全て誤りであることを知ってもらいたいのです。私が他の医療を批判する時には、38億年間の免疫の進化を背負っていることを知っておいてください。

代替医療（だいたいりょう、英: [alternative medicine](#)）とは、「通常医療の代わりに用いられる医療」という意味が込められた用語である。（通常医療とは何でしょうか？症状を取るだけの医療です。病気の原因を何も考えずに、患者にしばしの快楽を与える医療であります。つまり免疫の遺伝子の発現を抑える医療だけであり、間違った医療であります。）代替医療は「補完医療」、「相補医療」とも呼ばれる。（補完医療は、免疫を抑える医療もあり、免疫を高める医療もあります。ときには免疫には直接関係ないパフォーマンス医療も含まれます。アッハッハ！）Medicineは医療とも医学とも訳されることがあるので「代替医学」とも呼ばれる。その一方で、補完医療（ほかんりょう、[complementary medicine](#)）とは「通常医療や代替医療に取って代わるものではなく補完する医療」という意味が込められた用語である。米国でも日本でも学会等正式の場では代替医療と補完医療を総称して「補完代替医療」（[Complementary and Alternative Medicine: CAM](#)）の名称が使われることが多い。

通常医療と補完代替医療の2つを統合した医療は「統合医療」と呼ばれる。（今日の新聞にも、スイスの世界一の医薬メーカーであるノバルティスの不正が大々的に報道されていました。その中で我が母校の京都府立医科大学の循環器の松原弘明元教授に4億円を渡し高血圧に関するデータを捏造させたとして元社員が捕まりました。この元教授は研究資金が欲しかったので色々と協力したと述べていましたが、病気を治すのは医者でも薬でもないのです、4億円という巨額の金は要らないのです。血圧を下げようとすれば塩気の多いものを避け、適度な運動をして、食べ過ぎないようにし、標準体重を維持し、強欲をかきすぎて交感神経を刺激しないような心のあり方が一番大事なのです。人間はいずれ遅かれ早かれ死ぬものですから、若い人に迷惑をかけるような長生きはしない方がいいという心持ちで生きることが肝心です。病気を作るのは自分自身ですから、成人病を作るのも自分自身の生き方であることをもっと知らしめるべきです。

実は私の母校の免疫学の某教授が、退職された後に私立の医学大学で統合医療をやっておられるようですが、元来基礎をやっておられたので、あまり臨床は得意でなさそうです。彼が統合医療で扱っておられる病気のほとんどがヘルペスであることを気がついておられないようです。さらに彼が書いた免疫学の本においては、病気を治すには免疫が一番大事だと書かれていますが、かといって免疫を抑える薬が良くないと書かれていないところが問題です。やはり組織にいる限りは真実を語るができないのでしょうか。悲しいことです。彼も漢方と鍼灸も使っているようですが、漢方鍼灸と免疫の関係については全く考察していないところがさらに残念なことです。統合医学などのような言葉を用いずに、なぜ中国医学といわないのかも疑問です。）

もともとは欧米から発信されている用語であり、欧米での医療の歴史が反映している概念である。（以前にも書いたことがあるのですが、欧米においては民間療法としてのハーブは、医者が嫌いな民間人は今も医者にかからず細々と利用しているものであり、ハーブ医学といえるものではありません。それに比べて中国医学は、3000年近くの歴史を持った一大体系医学を作り上げています。しかも中国医学の天才漢方医達は彼らが用いている漢方薬や鍼灸が免疫を上げるということを知らずに打ち立てた東洋で生まれた最高の医学であります。従って現在でも西洋医学で治せない病気であると分かった患者は、東洋では中国医学に足を向けます。そして免疫を抑える西洋医学の薬をやめて免疫を上げる漢方や鍼灸に変えることができます。そのような人たちが当院にもたくさん来られるのです。

ところが欧米の医学はひとたびステロイドをはじめとする免疫を抑える薬を用いてしまうと、東洋と違って漢方や鍼灸がないものですから、ステロイドから逃れられなくなってしまうのです。そこに免疫の働きとほとんど関わりのない代替医学といわれる訳の分からない医学が生まれる余地があったのです。代替医学ではステロイドをやめるときのリバウンドを乗り越える力がないので、元の木阿弥となり、死ぬまでステロイドを使わざるをえなくなり、欧米の製薬メーカーが大儲けするキッカケとなります。しかもおこぼれを欧米の医者は懐に入れることとなります。悲しい話です。もちろん欧米の医者達はすべからず現代の病気の原因が化学物質とヘルペスであることは何も知らないのに、いや知っているのでしょうが、日本の患者と同じく欧米の患者も、医者や製薬メーカーに踏んだり蹴ったりされても何一つ文句を言えません。悲しいですね！原因が分からないという病気に医者は手を出さな、と叫びたいです。原因が分からないにもかかわらず医者が手を出すものだから、とどのつまりは病気を作って医者はお金儲けをしているだけです。これがグローバルな医療の真実です。薬と医者がいなくなれば病気はなくなります。だって病気がなくなれば医者も薬も何も要らなくなるからです。そうなれば誰が困りますか？ワッハッハ！)

分類

アメリカ国立衛生研究所 (NIH) に属する国立補完代替医療センター (NCCAM) は以下のように分類している。

【代替医学システム】 **alternative medical systems** または **Whole Medical Systems**

完全な理論体系と実践体系を持つもの。伝統医学にあたる。(完全な理論体系と言ったところで、免疫の遺伝子を根拠にして理論が作られない限りは、完璧に不完全な理論体系といえます。そんな理論は全く価値がないことがお分かりでしょう。ただ伝統医学というのは免疫を抑えるというようなアホなことはほとんどやってきていません。というよりも、伝統医学では免疫という概念が全くなかったのです。したくてもできなかつたのです。いわばある民族が世代から世代へと言い伝え、実践してきた風習や信仰に基づいた呪術医療ですから、目的的に現代の医療のように免疫を抑えるということはしなかつたので、というよりもできるはずがなかつたので、医療行為は毒にも薬にもならないという点で現代医学よりも優

れていたといえるのです。もちろん何もしないのと同然ですから、患者には良かったと言えるわけですね。ちょっとばかり皮肉な言い方ですね、アッハッハ！)

【心身医療的システム】 mind-body interventions

心理面からの働きかけによって身体機能や症状に介入しようとするもの。瞑想法や芸術療法などを含み、代替医療と見なされるものと現在では主流医療に取り込まれたものが含まれる（これは意味があるのです。なぜならば免疫は交感神経によって抑制され、瞑想療法や芸術療法は副交感神経を高めることで、免疫を抑えるステロイドホルモンを出しすぎることがないようにするので優れた医療といえます。）

【生物学的治療法】 biologically based therapies

ハーブ類や、サプリメントなどの物質を利用したもの。民間薬などと呼ばれる物がふくまれる。（ハーブや漢方は植物が身を守るために作った免疫の成分が入っている所以価値はあるのです。一方、サプリメントは今大流行りですが、栄養補助食品と訳されていますが、現代の病気は栄養を過剰に摂りすぎたために成人病が起こるので、逆に成人病になりやすいかもしれません。サプリメントが必要なのはアフリカや中南米の貧しい人たちだけでしょうが、お金がないので買える訳はないのが問題です。サプリメントにはビタミン、ミネラル、アミノ酸、不飽和脂肪酸などが含まれているようですが、先進国にこれらの栄養素が欠乏している人は誰もいません。さすがに炭水化物が入れられていないのはなぜだかお分かりになりますか？考えてください。）

【手技療法や身体を介する方法】 manipulative and body-based methods

カイロプラクティックや温熱療法など身体の部分や一部に接触することによる治療法（カイロプラクティックに関しては後にコメントしましょう。）

【エネルギー療法】

1. バイオフィールド療法：気功やレイキなど科学的に証明されていない人体の周囲や内部に存在するとされたエネルギー場に作用させる治療法（科学的に証明されていないという言葉は、実はあまり好きではありません。なぜならば免疫を抑える薬は科学的に絶対病気を治すことはできないということが分かっているにもかかわらず、現代の医療は全て科学的に行われているので、病気を治せると一般大衆に思わせているからです。現代の医療は全て資本主義的医療でありますから、医者も製薬メーカーも全て金が儲からなければ医療にはならないのです。現代医療は病気を治すために存在しているのではなくて、医薬業界がお金を儲けるためです。残念ですね。

先ほども書きましたが、医療の最終的な目的は、この世から全ての病気をなくすことです。そういう病気がなくなった暁にはどうなると思いますか？医者は全て失業し、製薬メーカーも全て倒産してしまいます。いつも私が言っているように、永遠に続く病気の原因は、化学物質とヘルペスとの戦いしかないので、この2つとも全世界の医学会は認めようとしません。慢性疾患、つまり難病というのは全て原因が分からないとされ、従って原因が分からないのに医療行為をするというのは科学的行為ではありません。にもかかわらず医学という科学が堂々と大手をふって世界中を支配し、結局病気の原因が分からないと言っている医者に病気を治せる訳はないので、ますます病気が増えていくのです。

結論から言うと、現代の医学は科学ではありません。それでは現代の医学はなんでしょうか？医学という科学の冠をつけた宗教です。無知な人は宗教が大好きですから、世界中の一般大衆は医学という宗教に惚れ込み、病気が増えるばかりです。病気を治すのは38億年かけて作り上げられた自分の免疫の遺伝子であることを医者誰一人として言わないからです。ちょうどこの世に神などは存在しないことを誰も言わないものから、あらゆる宗教が大手をふってはびこっている上に、新興宗教も新たにどんどん生まれています。

韓国のセウォル号が沈没して300人の高校生がなくなりましたが、その船会社のオーナーが何百億円も資産を持っている新興宗教の教祖であるようです。彼は人を救うために宗教をやっていると言っていますが、前途ある若い人たちを殺してお金を儲けても何の責任も感じずに逃げ回っています。彼らにとっては金が神であるということなのでしょう。残念なことに、世界中のどの宗教も似たり寄ったりですね。悲しいですね。

皆さん、実を言えば私はこの世に神がいることを実証できるのです。絶対変えることがなく、地球上の全ての人間に永遠に伝わっていく唯一の神が実は存在しているのです。それが遺伝子なのです。私は患者さんの病気を治せる免疫の遺伝子だけを信じているので病気を治すことができるのです。いや、患者さんが絶対に治せる自信があるのです。自分の生命を守るために、神なる遺伝子が全ての人に分け与えられているのです。ところがその神にも、良い神と悪い神がいます。良い神は意思に関わらず生命の営みを支えてくれている免疫の遺伝子であり、生理学や生化学を成り立たせている遺伝子であります。ところが悪い神がいます。自分の生命を維持するために他人の生命を傷つけても何とも思わない遺伝子です。これが自分のエゴだけを守るという遺伝子です。セウォル号のオーナーであ

る教祖は、まさに極悪非道の神なる遺伝子を持っているのです。そのような男が新興宗教の神の遣いである教祖であるとは世の中はまるで狂っていますね。どうしたらいいのでしょうか？分かりません。皆さん、考えてください。)

2.生体電磁気療法：電磁気刺激を通常医療とは異なる方法で使用する療法

代替医療を全て分類しきることは困難であるが以下の4つのタイプにも大まかに分類している人もいます。

【1、伝統医学】

伝統中国医学、韓医学、アーユルヴェーダ(インド医学)、ユナニ医学(en:Unani)等、数百年以上の長きに渡り、それぞれの国家において多くの伝統医師により研究・継承されてきた歴史・伝統があつて、奥深さや広がりを持った体系を持っており、各国の国民の健康を長らく支えてきた実績のあるもの。近代以降、現代西洋医学が前面に出てくるまでは、むしろこちらが主流であつたもの。(先ほども書いたように、伝統医学は19世紀の終わりに、コッホやパスツールによって、病気で人が死んでいく原因が細菌やウイルスであり、それに対して1796年に天然痘に対してジェンナーが牛痘ワクチンを作ったように、様々な病気に対する新しいワクチンを作ることによって一挙に病気で死ぬ人がいなくなりました。それまでの伝統医学は、人が死ぬ病気の原因が何であるかを全く知らずに、専ら経験に根ざした哲学思想によって長い時間をかけて徐々に打ち立てられたいわば形而上学的医学と言つてもよいのです。だからこそ自分の免疫で敵に打ち勝つ人は生き残り、負けた患者は死んでいくだけだったので。目に見えるのは病人が苦しみ、死んでいく姿だけです。症状だけが病気の全てにならざるをえなかつたのです。この症状が人体に入った目に見えない異物と免疫と戦っているなどとは想像を絶することでありました。だからこそ病気の原因が目に見える細菌によるものであり、しかもワクチンによって病気がなくなることを証明することができた西洋医学を目の当たりにした一般大衆は、18世紀の終わり頃から勃興し始めた新しい西洋医学が素晴らしいと思わざるをえなかつたのです。このはじめのワクチンを作り始めた西洋医学は、まさに良い西洋医学でありました。

ところが19世紀の後半から様々な免疫抑制剤である解熱鎮痛薬が作られ始め、免疫を抑えて病気を作るもうひとつの間違った西洋医学の曙が始まりました。その中に今なお使われているアスピリンが含まれているのです。さらに1928年に

アレクサンダー・フレミングが抗生物質であるペニシリンをカビから発見し、1941年にフローリーらがブドウ球菌やレンサ球菌感染症にかかった患者に投与し、臨床的に有効性が最初に証明された抗生物質となったのです。この抗生物質を作る西洋医学は良い西洋医学であったのです。ここで皆さんに知ってもらいたいのは、このように西洋医学は一方で病気を治し、一方で病気を作ってきた医学であると言えるのです。病気を治す西洋医学の功績はワクチンと抗生物質だけではありません。もちろん西洋医学によって衛生法も開発され、かつ病気を治すのも栄養状態が良くなければならないということも西洋医学が見いだした真実であります。この良い西洋医学は、全て患者の免疫をヘルプすることができることを証明した西洋医学の貢献であります。他方、免疫の働きを抑えて症状を取るというあらゆる種類の解熱剤や鎮痛剤が新たな病気を作っていったのです。

ところが現代西洋医学は、この負の面を絶対に一般大衆に知らせようとしません。あらゆる種類のワクチンと抗生物質の開発は全て終了したので、人間が死んできた病気が全てなくなったのでありますが、一方では、現代文明が作った化学物質によるアレルギーや膠原病の原因を明らかにせず、しかも免疫を抑えるばかりですから、これらの病気が永遠に治らないようにしているのが現代の西洋医学であります。なぜならば病気を治すのは自分の免疫の遺伝子だけですから、免疫を抑える薬を使う限りは絶対に病気は治らないのは当たり前のことなのです。私があらゆる難病を治しているように見えますが、実は膠原病やアレルギーを治しているのは患者さんの免疫であることを忘れてはいけません。）

【2、民間療法】

国家的な広がりではなく、小集団によるもの。歴史があるものも、最近登場したものもある。アメリカで発祥したカイロプラクティック。アメリカでは国家資格として扱われており、資格を持つ者は **doctor of chiropractic** と呼ばれる、オステオパシー、大正時代に日本で発祥し、欧米で先に普及したレイキなど。（カイロプラクティックに関しては、後にコメントします。）

【3、栄養にまつわる療法】

食餌療法の延長として、効果を期待するもの。特定の食事、食事法のことあれば、食事成分のこともある。食事成分の場合、完全に同一成分の錠剤を摂取しても保険制度を利用すれば通常医療という位置づけである。（栄養状態が悪い時に、不足した栄養素を補充することは必要であります。例えばクローン病や潰瘍性大

腸炎の患者さんは、食べたものが下痢で流れさってしまうので、アルブミンというタンパク質が極度に減ってしまいます。IVH（中心静脈高栄養剤）の中にこのアルブミンを補充してもらえば、6ヶ月間一切化学物質の入った食事を摂る必要がないので炎症も消え去り、かつ栄養状態も良くなるのですが、大病院はこのIVHを行うことを嫌がります。その理由の一つは、IVHはお金が儲からないのみならず、絶対に治らないと宣告したクローン病や潰瘍性大腸炎などの病気が全て治ってしまうからです。残念ですね。）

【4、最先端治療法】

西洋医学の医師によって研究され、一部では用いられた例はあったとしても、その時点ではまだ大半の医師からは標準的な治療としては認知されていないもの。例えば、1990年の日本における腹腔鏡手術など。（今はあちこちの施設でどんどん行われています。しかし腹腔鏡手術は技術的に極めて難しいので失敗例が新聞で度々報道されています。）

ただし、日本では歴史的に見ればむしろ東洋医学が主流医学であり現在でも用いられているので、東洋医学を代替医療に含めてしまうような欧米式の分類は日本の状況には馴染まない点があると指摘する人もいます。（本来、代替医療という分類が間違いなのです。正しい分類は、免疫を上げる医療と免疫を下げる医療のふたつしかないのです。だからこそ代替医療の分類を批判しているのです。東洋医学は世界に冠たる唯一の免疫を上げる医療であるので、代替医療の分類の中に入れるべきものではないのです。病気を治す医療だけが医療と呼ぶべきです。それが東洋医学であります。その中に中国医学が含まれ、韓医学があり、日本漢方があるのです。）

各国での状況

欧米の先進国において代替医療の利用頻度が急速に増加している。1990年代以降に代替医療への関心が高まっており、さらに代替医療の科学研究に大きく予算が配分され政策として実行されてきた。（代替医療の科学研究費も無駄なお金です。代替医療に分類されている東洋医学は3000年の歴史の中で確立されたものであり、全てが研究し尽くされたので、今更何も新たに臨床研究する必要はないのです。東洋医学の処方箋の合計は何万種類もありますから、その中から目の前の患者さんの症状に合わせて選ぶだけで良いのです。なぜならば東洋医学の全ては免疫を上げることができるからです。もちろん東洋医学をやる時には、絶対に免疫を抑える悪しき西洋医学の薬を使ってはいけません。常に病気を治すのは患者

さんの免疫であるということを忘れてはならないのです。もちろん必要最低限のワクチンや抗生物質と抗ヘルペス剤は免疫をヘルプできるので併用してもいいのです。)

実際に使用されている代替医療の種類はアメリカと日本ではかなり異なっている。例えば複数回答可のアンケート調査の結果のそれぞれ上位3を見てみると、米国では1位がリラクセーション 16.3%、 2位 ハーブ 12.1 %、 3位 マッサージ 11.1%であり、日本では1位 サプリメント 42.0%、 2位 マッサージ 31.2 % 、 3位 リフレクソロジー 20.2 %の順になっている。(これらはまさに快さを生み出すことはできても、免疫を上げる度合いは東洋医学に比べるとほんの少しですから、楽しみでやることはいいでしょう。ワッハッハ！)

アメリカ合衆国

利用状況

1993年、デービッド・アイゼンバーグ博士(ハーバード大学代替医学研究センター所長)はアメリカ合衆国国民の代替医療の利用状況についての調査報告を発表した。この調査は、この研究センターが研究している16種類の代替医療に関してのみを調査対象にしていた。16種類に限定していたにもかかわらず、利用状況は医師らの予想をはるかに超えていた。

1990年時点で、これら16種類の代替医療を受けたアメリカ国民は全国民の34%に達していた。代替医療の機関(治療院、ルームなど)への外来回数はのべ4億2700万回に達していた。この数はかかりつけ開業医への外来3億3800万回を超えていた。

この調査で、学歴が高い人、収入の多い人、知識人層など時代を先導してゆくとされる人たちほど、代替療法の方を評価し、積極的に利用している、ということも明らかになった

1997年の調査では代替医療への外来回数は6億2900万回になり、1990年の調査時のおよそ1.5倍に増加した。(これらの代替医療に参加している人たちの症状は、免疫とヘルペスウイルスとの戦いによるものと考えられます。いずれにしるヘルペスで死ぬことはないのですが、様々な程度の不愉快さが生じます。ヘルペスについてはヘルペスのコーナーを読んでください。)

研究と教育体制

日本、韓国、中国などでは正規の病院で漢方薬が処方されるが、アメリカでも10を超える州で医学的に効果の証明されたものには保険が適用されている。ただし、ホメオパシーなど現在でもその効用が実証されていないものは除外されている。

(ホメオパシーについては、ホメオパシーのコラムを読んでください。)

1992年、国民の利用関心を背景としてアメリカ国立衛生研究所(NIH)にアメリカ国立補完代替医療センター(NCCAM)が設置された。

当初の年間予算は200万ドルであったが、現在では1億ドル以上の予算が割り当てられている。全米の医科大学・医学ラボなどでの代替医療研究を振り分け、政府予算も割り当てられている。2000年にはホワイトハウスに補完代替医療政策委員会が設置された。代替医療の教育について、全米の医学生が少なくともひとつの代替医療を並行して学べる体制を各医学部が備えていることが望ましいとして、国立衛生研究所では公式に推奨している。そのような代替医療教育体制は全米の医科大学の50%以上で既に実施されている。1998年の段階でも、全米125医学校中75校が非西洋医療の講座・単位を持つようになっていた。医学生の側も80%余りが代替医療を身に着けたいとアンケートに答えている。

ジョージタウン大学は代替医療教育において初めて正規課程(修士課程)を定めた学校であり、国立衛生研究所が目と鼻の先にあることもあり、多くの代替医学研究がされている。また、アリゾナ大学の医学教授アンドルー・ワイルにより西洋医学による医療と代替医療とをあわせた統合医療が教育実践されている。(アンドルー・ワイル博士は代替医療で有名であります。病気の本質は分かっておられない人だと見受けられます。いずれにしろ代替医療に国が金をかけることは無駄です。そんな金を使うなら、テレビや雑誌で「全ての病気を治すのは免疫の遺伝子だけです」という情報を朝から晩まで流せばいいのです。もちろんついでに「免疫を抑える薬を絶対に飲んではいけません」という情報も流すべきです。こんな情報を流せば、全世界の医師会や薬業界からクレームが来て、どうにも収拾がつかなくなるでしょう。アッハッハ！)

イギリス

1983年、王室基金の援助で代替医療などの研究を行う、The Research Council for Complementary Medicine:RCCM が設置される。

1991年、イギリス保健省は医師が効用が医学研究者によって科学的に証明された代替医療の場合は治療家を雇用することが保険適用できることにした。

ウェールズ公チャールズの案で、5か年計画で国家レベルでの代替医療の研究が進められている。

2004年3月、西洋医学や中医学による鍼灸とハーブ療法の治療について資格制度ができることになった。これは英国保健省とチャールズ皇太子のThe Prince of Wales's Foundation for Integrated Health が制度化に向けてすすめてきた。

ただし、2010年2月22日、庶民院科学技術委員会（House of Commons Science and Technology Committee）が、ホメオパシーはプラセボと同程度の価値しかなく国家がNHS（公的保険として支援）とするに値しない、と結論づけ、保険適用は国ではなく地元のNHSと医師の判断に委ねられた。

ドイツ

日本補完代替医療学会によって、主要先進国では最も代替医療が活用されていると報告された。

アジア全般

日本、韓国、中国などでは正規の病院において東洋医学による治療が行われており、漢方薬が処方されている。（漢方薬は代替医療ではありません。免疫を上げない治療は保険に適用されるべきではありません。ましてや免疫を下げる薬が保険に適用されているのは一体どうしてなのでしょう？分かりません。残念です。）

日本

日本で代替医療の歴史をさかのぼるといことは、伝統医学等の歴史をさかのぼるといことになるので、その起源を明らかにすることは困難な面がある。近年では西洋医学の視点から代替医療を検証しようとする動きがあり、1997年に日本代替医療学会（現 日本補完代替医療学会）が創設された。会員数は約1000名で、会員構成比率上位を5つを挙げると内科医、外科医、薬剤師、産婦人科医、小児科医となっている。1998年には日本代替・相補・伝統医療連合会議が、2000年には日本統合医療学会が設立された。漢方医学は日本の伝統医学なので以前から日本の大学医学部において講座が設置されていたが、2002年3月には補完代替医療学講座という名称では初となる講座が金沢大学に誕生した。日本ではさらに、北陸大学薬学部にて代替医療薬学教室が、大阪大学大学院医学系研究科にて生体機能補完医学講座が設置されている（2006年現在）。（

具体例

日本で行われることがある代替医療の具体例としては以下のようなものがある。

・ 東洋医学（伝統中国医学、漢方医学）

※ ただし、東洋医学（漢方医学）については、代替医学に含める見解も、含めない見解もある。上述のごとく東洋医学（漢方医学）を代替医療に含めてしまうのは日本の状況に馴染まない、歴史的に見ればむしろ東洋医学が主流医学である、と指摘する人もおり、また、日本で多くの病院の医師（臨床医）などが手元に置いて治療法の選択時に参考とする『今日の治療指針 -私はこう治療している-』などでも、処方例の中に漢方薬も挙げており、医学部で西洋医学系の訓練を受けた医師も日常的に漢方薬を処方する例は近年増えており、日本ではいわば"通常医療"としての面も持っているのです。これについてはやはり欧米風の単純な分類は馴染まない。（日本に漢方薬があるからこそ、全ての病気は患者さんの免疫で治してくれるのです。）

- ・ 鍼灸
- ・ 指圧や柔道整復。
- ・ その他の東洋の各種伝統医学

例えばインドのアーユルヴェーダ（後にコメントします。）

- ・ マッサージ
- ・ オステオパシーやカイロプラクティックのような欧米発信の手技療法
- ・ アロマセラピー

また

- ・ 各種療術、民間療法
- ・ 宗教的なヒーリング
- ・ ホメオパシー

鳩山由紀夫首相は2010年1月29日の施政方針演説で「統合医療の積極的な推進の検討」を表明した。これをうけて厚生労働省は、統合医療への保険適用や資格制度の導入を視野に、2月5日に統合医療プロジェクトチームを発足させた。プロジェクトチームは統合医療の研究がさかんなアメリカの国立衛生研究所のジャンル分けを参考に、中国医学やアーユルヴェーダ、ユナニ、断食療法、瞑想、磁気

療法、オゾン療法、気功を含んだ統合医療の日本国内での実態把握をはじめることにした。

注意点

一部のカルト集団が勧誘の手段として代替医療を行っている例もあるという。

ホメオパシーなどの一部の代替医療の喧伝には類感呪術、感染呪術の手法が見られる場合があり、これらの手法に対する親和性の高い読者層をターゲットとした雑誌、書籍類（日本ではLOHASを採り上げる女性誌）において広く広告、喧伝が見られているという。

代替医療とエビデンス

補完代替医療に用いる薬物の科学的検証の手順などは、現代西洋医学でのそれとは異なっていることが多い。現代西洋医学の場合では、新奇な物質を用いようとすることが多いわけなので、まず物質を同定してから細胞実験、動物実験、人体における臨床、という順で行われるが、代替医療の薬の場合は、すでに広く用いられているものが多く、古くからヒトで使用されており安全性が確認されているものが多いため、動物の安全性試験を通過したものは、臨床試験で本当に有用なのか判定した後に、物質の同定へと進むので、順序が異なるのである。最近では補完代替医療の専門雑誌も数多く発刊されるようになっており、科学的なエビデンスが急速に蓄積されつつある。eCAMという専門誌もあり、これは日本側の研究者らの提案によって発刊され、東洋医学の成果の投稿に適した国際誌であり、インターネットで無料で閲覧可能である。（Evidence-based Complementary and Alternative Medicine）

代替医療の中には、鍼灸・漢方（薬用植物）・推拿のように、長い歴史の中で経験的に有用性が認められてきたが、近年改めて科学的実験・調査が行われ、有意な治療効果が見込めることが確認されるようになった療法もある。鍼灸・漢方といったような代替医療にもエビデンスを主体にした考え方も出てきており、また、WHOが1996年、鍼灸における適応疾患を起草したり、1997年、NIHの鍼治療の合意形成声明書が発表され、西洋医学の補完代替医療へのアプローチも進んできている。（医療のエビデンス（証拠）というのは、免疫が上がるかどうかだけですから、その観点がない限りエビデンスを云々することに意味はありません。）

米国政府は補完代替医療の有用性を検証研究するため、米国NIHの下部組織として国立補完代替医療センター（NCCAM）を設立した。

イギリスにおけるリフレクソロジーのように、数年にわたる実データの蓄積を含む正規の科学的な検証を経たうえで、議会の承認を経て正規の保険医療に組み込まれ成果をあげているものもある（日本においてはまだ”リラクゼーション”や「代替医療」扱いである）。（リフレクソロジーというのは、掌や足の裏などに体の各器官の状態を反映した箇所があるという考えに基づいて、それらを刺激して健康を維持増進する療法であります。日本語に訳すと反射療法といいます。指圧の一種と考えてください。この指圧療法も局所を指などで揉んだり叩いたりして神経を刺激し、血行を促進するという治療法であります。指圧療法はまさに鍼灸の経絡の考え方から生まれたものであります。指を使うだけです。鍼のように痛いこともなく、お灸のように熱くないのです。だからこそ免疫を上げる力は弱いのですが、快い気分させることは確かです。）

食事療法や健康食品のような分野は代替医療の中でも研究が行われにくいため、エビデンスが少ないと報告されている。米国では、食事療法や健康食品の使用については特定の疾患では注意した上で容認するというガイドラインがある。（代替医療を勉強したら分かるように、免疫との関わりについては一言も書かれていません。従って免疫を語らない医療は語るに落ちるのです。にもかかわらず代替医療についてコメントしているのはドン・キホーテ的ですね。しかしながら快適さと慰安の欲しい人はやってみてはどうですか？アッハッハ！医療という言葉を使うことが許されるのは免疫を上げて病気を治すという場合だけです。アッハッハ！それでは病気を作る現代医療は医療と言うべきでしょうか？正しい言い方を考えてください。現代医療は〇〇であります。この〇〇に二字の漢字を入れてください。私のホームページを読んでいる方は賢い人たちばかりですから、すぐに答えが分かるでしょう。アッハッハ！）

サイモン・シンらが行ったEBM（科学的根拠に基づく医療）の手法を用いた調査では、「鍼灸はいくつかのタイプの痛みと吐き気には効いている」とされた。また同調査で、「カイロプラクティックは腰痛の治療にのみ有効性が認められる」「ホメオパシーについては、ほぼプラシーボ効果である」とされた。英国カイロプラクティック協会はサイモン・シンを訴えていたが、最終的に訴訟は取り下げられた。（サイモン・シンという人はなかなかの人物ですね。近頃EBMという

言葉が氾濫しています。EBMは頭字語であり、Evidence-Based Medicineの略であり、日本語では「科学的根拠に基づく医療」となります。この標語は臨床でよく使われますが、実は不完全なキャッチフレーズです。正しくは Immunology-Based Medicineというべきです。つまり「免疫学的根拠に基づく医療」とするべきです。略してIBMというべきです。IBMというIT会社がありますから間違われると困るのでEBMにしたのでしょうか？ワッハッハ！

なぜEBMではダメなのでしょう？答えは簡単です。この科学的根拠という意味は、症状が取ればその治療法が有効で正しいとされるからです。これが大間違いなのです。EBMが最高度の薬はなんだと思いますか？ステロイドです。ステロイドがEBMに根ざした最高の薬となるからです。ステロイドこそ患者の遺伝子を変えて病気を作る最悪の薬であるのにも関わらず、一時的に、しかも一挙に症状が取れるという有効性はあらゆる薬の中で最も顕著であるからです。なぜこんな誤りを生み出すEBMという医療が世界中で闊歩しているのでしょうか？まさに世界中が間違った医療をしているからです。つまり症状が一時的に取れさえすれば最高の薬だと認めなければ、製薬メーカーも医者も金が儲からないからです。

なぜこんな誤りがいつまでもいつまでも続くのでしょうか？答えは極めて簡単です。病気は体内に入ってくる異物と免疫の遺伝子の働きによって生ずる正しい戦いであることを認めようとしないからです。認めてしまえば医薬業界が一晩で壊滅してしまうからです。見えない免疫の働きは医学者や薬学者だけが知っていることですから、大衆に知らせることはないのです。大衆が病院に行くのは症状が出たからであり、その患者の症状さえ取ってやれば喜んでお金をくれるからです。どうしたら症状が取れますか？免疫の遺伝子の働きをストップさせればいいだけです。一挙にストップできる薬は何でしょうか？ステロイドです。ステロイドについてはステロイドのコーナーを読んでください。

異物と戦う免疫の遺伝子の働きの発現はステロイドで一挙に止められるのですが、後で必ず遺伝子の修復が行われ、再び戦いが始まります。なぜならば敵がいつまでも人体にとどまっているからです。既に何回も繰り返し伝えていますが、免疫を抑える薬は厚労省は認めるべきではないのです。なぜならば永遠に病気を作り続けるからです。つまり人体に入った敵と死ぬまでたちごっこを続けなけ

ればならないからです。だからこそ医薬業界は永遠に病気を作って栄え続けていくのです。残念です。

ついでにSTAP細胞もとうとう無に帰しました。小保方女史はES細胞もこっそり入れていたようです。元来STAP細胞は何も生まれていなかったのですが、ES細胞が入れられていたので訳の分からない細胞となり、それをSTAP細胞と名付けただけなのです。新聞記事の詳細を読む限り、恐ろしい人ですね、と言うしかありません。ついでに遺伝子を一時的に変えられて作られたiPSも、必ず遅かれ早かれ遺伝子の修復が行われるので、近いうちに6人の加齢性黄斑変性症にiPSが用いられるようですが、必ず失敗することを予言しておきましょう。この予言が当たれば、私もノーベル賞をもらえるのでしょうか？それとも予言が外れれば、私は〇〇されてしまうのでしょうか？38億年かかって作られた神なる遺伝子が強欲な人間の頭脳に負けると思いませんか？)

プラセボ以上の医療効果が無いものまでも代替医療の範囲に含めるべきかについて議論がある。サイモン・シンらが行ったEBMの手法を用いた調査では、「カイロプラクティックは腰痛の治療にのみ有効性が認められる」、「ホメオパシーはほぼプラシーボ効果である」とされた。ホメオパシーについては、イギリスの下院委員会も「ホメオパシーには偽薬以上の効果はない」として公的扶助の対象外（保険適用外）とすべきであると言う報告書をまとめた。（先ほども言いましたように、効果という言葉を使う前に、なぜ腰痛が起こるのか、なぜプラシーボ効果がでるのか、についてまず免疫学的に正確に語らなければ医療というべきではありません。さらに公的扶助も、症状を取るのではなくて病気を治してこそ与えられるべきものなのです。）

次にO-リングテストについてです。

O-リングテスト（正式名称 Bi-Digital O-Ring Test、略称 BDORT）は、手の指の力による代替医療の診断法である。（代替医療という医療は、現代医療が免疫を抑えることをやるだけで、病気の原因を治している訳ではないということを知った人たちが作り上げたつまらない医療の一つです。）ニューヨーク在住の大村恵昭（1934 - ）が発明し、1993年に米国特許 5188107 を取っている。（O-リングテストは日本人が初めてやったとは驚きです。）

患者が手の指で輪（O-リング）を作り、診断者も指で輪を作って患者の指の輪を引っ張

り、輪が離れるかどうかで診断する。この時、患者の体の異常がある部分を触ったり、患者の空いたほうの手で有害な薬や食物を持つと、患者の指の力が弱まり O-リングが開く、とされる。もともとこれはアプライドキネシオロジーの応用で、当初は腕の力の強弱による診断だった。のちにそれが指の力でも診断可能とされ、この診断方法が提唱された。(手の指の力ではなくて、足の指の力でもよかったのではないのでしょうか？ワッハッハ！O-リングテストは、ここで書かれているように、腕の筋肉力や指の筋肉力の強さを判断するだけで止まるべきだったのです。アプライドキネシオロジーは、応用運動療法、あるいは応用身体運動と訳されます。キネシオロジーについてはすぐ下に書かれています。)

キネシオロジーの語源

キネシオロジーkinesiology=ギリシャ語のキネシス(kinesis)“運動、動き”と、ロゴス(logos)“学問”を合成した言葉。

キネシオロジーの歴史

1964年にコロラド州デンバーで行われたカイロプラクティック会議で、ジョージ・グッドハード博士により発表された。当初は医療家や治療家向けのものだった。現在は、「アプライドキネシオロジー (AK)」として、日本でも学ぶことができる。

1967年には世界で始めてキネシオロジー学科(身体運動科学科)がカナダ・オンタリオ州立のウォータールー大学応用健康科学部に設置された。運動生理学や人間工学、バイオメカニクス(生体力学)、神経科学などが身体運動科学分野の主要な学問領域である。

1973年にジョン・F・シー博士が、アプライドキネシオロジーを一般家庭で使えるようにと簡単にまとめ、タッチ・フォー・ヘルスという学問を作った。これ以降、キネシオロジーは世界的に広がりを見せる。今では、キネシオロジーは200種類以上にものぼり、世界の105カ国以上で何百万人もの人々に活用されている。

日本でのキネシオロジーの広がり

日本で最も有名なキネシオロジーのひとつは、おそらくバイデジタルOリングテストと考えられる。指の筋肉の強さを検査するテスト方法で、適切な薬やサプリメントを選ぶ方法として、医療者の間で広まっている。(全く医学には関わらないのがキネシオロジーでありOリングテストですね。なぜならば免疫学との繋がりが皆無であるからです。)

その次に広まったのが、代替療法・セラピー・ヒーリングとしてのキネシオロジーである。日本ではまず、1990年にスリーインワンという感情解放のためのキネシオロジー

の最初のセミナーが、兵庫県西宮市で初めて開催された。その後、家庭で行える健康法としてタッチ・フォー・ヘルスが1998年以後広がる。さらに2002年にブレインジム(教育キネシオロジー)のセミナーが開催され、世界の3大の民間キネシオロジーが、日本に根ざすこととなった。その後、アプライド・フィジオロジーやフェイシャル・ハーモニーなど最先端のキネシオロジーが、日本に紹介され始めており、2010年には、日本で初めてIKC(国際キネシオロジー大学)主催のキネシオロジー世界大会が、京都にて開催され、日本にキネシオロジーが広がりが期待される。最近では、国際的なキネシオロジーの機関に認定されているインテグレイティッド・ヒーリングというキネシオロジーのセラピストが、日本に数名誕生している。また、ここ数年、海外からウェルネス・キネシオロジーの創始者を招聘し、定期的に日本で講座を行なわれ、多くのプラクティショナーが誕生し始めている。(趣味でやるべき楽しみの一つがキネシオロジーでしょうね。)

キネシオロジーの種類

タッチ・フォー・ヘルスの誕生により、さまざまな研究がなされ、キネシオロジーは発展していく。

治療家・医療者のためのキネシオロジー(医科向けキネシオロジー)

アプライド・キネシオロジー、バイデジタル0リングテスト

教育のためのキネシオロジー(教育キネシオロジー)

ブレインジム

3各代替療法分野のスペシャリストを育成するためのキネシオロジー(スペシャライズド・キネシオロジー)

アプライド・フィジオロジー、インテグレイティッド・ヒーリング、ウェルネス・キネシオロジー、エンライトメント・キネシオロジー、サイバー・キネティック、スリーインワン(ワンブレイン)、タッチ・フォー・ヘルス、PKPなど

ウェルネス・キネシオロジー(「バイオキネシオロジー」と、「タッチフォーヘルス」を基礎に、ウェイン・トッピング博士が独自に研究を重ね「感情ストレス」の解消法、アレルギー等の講座を日本開催)

次はカイロプラクティックです。

カイロプラクティック(Chiropractic)とは、1895年にアメリカのダニエル・デビッド・パーマーによって発案された手技療法であり、日本における整体療法とは異なる療法である。ギリシャ語で「カイロ」は「手」、「プラクティック」は「技」を意味する

とされている所から生まれた造語。WHOでは補完代替医療として位置づけられている。
(カイロプラクティックは、日本語では脊椎調整療法とか脊柱指圧療法と訳されます。
手の技によって脊椎のゆがみを矯正し、神経の働きや生理機能を回復する方法でありま
す。)

発祥国のアメリカや、イギリス、カナダ、オーストラリア、EU諸国など、一部の国に
おいては法制化されているが民間療法、代替医療のひとつであり、「アメリカやヨーロ
ッパ諸国では医者として認定されている。」等は間違いである。これはアメリカにおい
て、Doctor of Chiropracticという第一職業専門職学位が授与されることで、Doctorを
医師と間違って訳していることが原因と考えられる。アメリカにおいては、Doctor(Dr.)
の敬称は、医師にのみつかうものではなく、Doctorate degreesが授与される専門職、
PhDの学位をもつものを習慣的にDr.の敬称をつけて呼ぶ。こういった背景から、アメ
リカにおいて医師として認定されるというのは事実と異なるが、国家試験と州試験を合
格すればDoctorとして認定される医療従事者である。

日本においては法的に存在せず、誰でも医業類似行為として施術出来る。(日本でもあ
ちこちでカイロプラクティックが行われていますが、誰でも医業類似行為として施術で
きるからカイロプラクティックを生業にしている人がたくさんいます。)

概要

カイロプラクティックの定義は、様々な団体や教育機関によって異なる場合が多い。ま
た、カイロプラクティック発祥時の哲学であった、疾病の原因が脊椎などの椎骨（運動
分節）の構造的、機能的な歪みにあるとの考え、その歪みを調整することで疾病を治療
することがカイロプラクティックだと考える人が多い。しかし、カイロプラクティック
の定義や考えの違いはあるにせよ、現在の法律のもとで実際に行われているカイロプラ
クティックは、その国や州の法律に基づくものである。アメリカカイロプラクティック
学会(en:American Chiropractic Association)が定義するカイロプラクティックとは、筋
骨格系と神経系疾患に特化した医療であるとされている。カイロプラクターは薬物/手
術療法はせず、独自の手技療法を治療の主な手段とし、検査、診断と治療を行っている。
カイロプラクターは幅広い診断知識を有し、手技療法に加え、理学療法やリハビリ、栄
養/食事指導や生活習慣の指導も行っている。州の法律に規定された業務範囲以外の治
療や検査が必要な場合、他の医療機関を紹介する。アメリカでは"ドクター"としてこの
ような社会的役割を果たしているのがカイロプラクティックの現状である。しかし、日

本においては法律がないので、行われているカイロプラクティックは定義しようがなく、その内容は個人によって大きな違いがある。(カイロプラクティックは、元来病気の原因が脊椎などの椎骨の構造的・機能的ゆがみにあり、そのゆがみを調整することで病気が治るという考え方であります。椎骨のゆがみとは一体なんなのでしょう？椎骨はあくまでも中枢神経の一部である脊髄神経が入られている脊柱管を作っている部品であります。この椎骨は上から頸椎骨が7個、胸椎骨は12個、腰椎骨が5個、仙椎骨が6個あり、全部で30個の椎骨があります。まずこの椎骨が構造的にゆがみがあるということは、一体どのような意味を持つのでしょうか？さらに椎骨の機能のゆがみとは一体なんなのでしょう？これに対する考察を乞うご期待！今日はここまでです。2014/06/12)

世界保健機関の定義によると、筋骨格系の障害とそれが及ぼす健康全般への影響を診断、治療、予防する専門職である。治療法として関節アジャストメントもしくは脊椎マニピュレーションを徒手によって行う治療手法を特徴とし、特にサブラクセーションに注目している。(マニピュレーションというのは、手を用いて骨折や脱臼などを元の状態に整復することです。柔道整復師という職業をご存知でしょう。彼らは柔道で骨折や関節が外れて脱臼になった時に、元の正常な状態に戻す仕事をしている人のことです。サブラクセーションとは亜脱臼や不全脱臼と訳します。脱臼というのは、ご存知のように、骨が骨の関節から外れることです。カイロプラクティックの仕事は、筋肉と骨格の傷害を手を用いて正常に戻すことです。骨と骨とが繋がっているところを関節といいます。この関節は筋肉によって自由に動けるようになっていますが、外れないように靭帯で関節の周りをがっちり固められています。関節の種類によって少しか動く関節とよく動く関節の2種類があります。外から無理な力が関節に加わると、関節から骨が外れたり、周りの靭帯が伸びすぎたりして、正常な元の関節に戻らないことがあります。このときに手術ではなくて徒手によるカイロプラクティックによって援助してあげると、患者自身の免疫の修復の力で元に戻せるのです。

普通の生活では関節の筋肉と骨が異常になることは滅多にないことですが、その関節の周辺の神経に痛みが出たり、疲労感があったり、動かしにくくなったりすることがあります。実はこの原因は、ほとんどが筋肉や腱を支配する運動神経や感覚神経や自律神経に潜んでいるヘルペスと免疫の戦いであるのです。ところが現代医学はこのヘルペスと免疫の戦いによって生じるヘルペス性神経炎であることを認めようとしないので、カイロプラクティックや整体が流行ることになるのです。もちろんカイロプラクター自身も、この事実を知る由もありません。人類に最後に残された病気の原因は、化学物質とヘルペスであることを肝に銘じておいてください。従って抗ヘルペス剤を投与し続けられ

ば、医者の仕事もカイロプラクターの仕事もなくなってしまうことになるでしょう。アッハッハ！人を殺すことがない病気の原因で、人類発生以来、人類を悩ませてきた病気の原因は何だと思いませんか？8種類のヘルペスウイルスであります。この事実を今もお世界中の医学会は認めようとししないのが残念です。)

カイロプラクティックの名称は、ギリシャ語の **Chiro** (手) と **Prakticos** (技術) を組み合わせた造語である。これは、上記の歪み調整のためにアジャストメントと呼ばれる手技療法を用いることに由来する。(アジャストメントというのは、調整とか修正などの意味です。)

日本のように法制化されていない国では、未熟なものがカイロプラクティックの施術を行うと神経を痛める危険性がある。そのような危険を避けるためにも、しっかりとした教育を受けたものと、そうでないものを区別するための明確な基準を作ることが急務である。国民生活センターは整体、カイロプラクティック、マッサージ等で重症事例が発生していることから、2012年には手技による医業類似行為の危害の報告書をまとめた。カイロプラクティックは法的資格制度がないため、施術者の技術水準や施術方法等がばらばらであることが指摘された。カイロプラクティックの施術を行う者をカイロプラクターと呼ぶが、資格として法制化されているのは、アメリカ、イギリス、カナダ、オーストラリア、EU諸国など約40カ国である。日本を含む他の多くの国では、いまだ公的資格等は定められていない。(日本でカイロプラクターを公的な資格として法制化しない理由はどうしてでしょうか？カイロプラクターが扱う病気自体がたいしたことないからです。マッサージ師が国家資格が必要であるのに、なぜカイロプラクターが国家資格が要らないかの理由は私には理解できません。マッサージ師にしろ、重症患者を扱うことは絶対にないのにもかかわらずです。)

世界保健機関 (WHO) は、カイロプラクティックを代替医療として位置付けている。2005年には、安全で有用なカイロプラクティックの教育を目的とした「カイロプラクティックの教育と安全性に関するWHOガイドライン (指針)」を発行し、現在は日本語を含む10ヶ国語以上に翻訳されている。

1997年には、世界保健機関 (WHO) に NGO として世界約80カ国からなる団体、世界カイロプラクティック連合(WFC)がカイロプラクティック団体として初めて認可された。現在のWFC日本代表団体は日本カイロプラクターズ協会(JAC)である。

施術資格

日本においては何ら制限が無い。学校の設立も自由。

アメリカやカナダにあるカイロプラクティック専門大学では、ドクター・オブ・カイロプラクティック (Doctor of Chiropractic) (D.C) 職業学位 (First professional degree) が取得できる。

イギリス、オーストラリア、スイス、デンマーク、南アフリカ、ニュージーランド、マレーシアなどのカイロプラクティック学科のある大学では、卒業時に、DC号ではなく、修士号または学士号の学位が取得できる。卒業後、カイロプラクターとして働くには、各州もしくは各国のカイロプラクティック資格試験に合格しなくてはならない。(外国ではカイロプラクターとして働くのには、カイロプラクティック資格試験に合格しなければならないのに、なぜ日本では放置されているのでしょうか？わかりません。いずれにしるカイロプラクティックが手技によるものでありますから、患者に対して大きな害をなすことがないので、黙認されているのでしょうか。)

次は整体についてのコメントです。

整体 (せいたい) とは、脊椎・骨盤・肩甲骨・四肢 (上肢・下肢) など、からだ全体の骨格や関節の歪み・ズレの矯正、骨格筋の調整などを、手足を使った手技と補助道具でおこなう技術体系およびその行為。医療制度から見れば補完代替医療の一種、法制度からは医業類似行為の一種とされる。「整体術」・「整体法」・「整体療法」とも呼ばれる。光線療法・温熱療法など周辺の技術を含め、以前から療術の一つとされてきた歴史があり、今もそのように扱われる。(カイロプラクティックと同じように、読んで字のごとく、手技によって骨格の歪みや異常を整えて健康増進を図る民間療法といえいいのでしょうか。それでは健康とは何でしょうか？健康増進とは何でしょうか？言えることは、病気を治すことではなくて、体を整えるというだけですから、マッサージとあまり変わらない行為でしょう。整体師もカイロプラクターと同じく国家資格ではないので、誰でも名乗れる程度の民間資格です。)

解説

現在の整体は多種多様である。日本武術の柔術や骨法などの流派に伝わる手技療法を中心とする整体、伝統中国医学の手技療法を中心とする整体、大正時代に日本に伝わったオステオパシーやカイロプラクティックなどの欧米伝来の手技療法を中心とする整体、

各団体の独自の理論や思想などを加えた整体などが存在する。かつて柔術や骨法などでは、「正体」・「正體」・「整體」・「整胎術」などと呼称されていた。なお、現在の整形外科学をベースとした柔道整復（接骨・整骨）とは、施術に対する思想、施術内容がまったく異なる。

整体師の資格

整体師は民間資格のため誰でも名乗ることができる。

整体の医学的効果

2012年に代替医療の国際的な学術雑誌 *Evidence-Based Complementary and Alternative Medicine* で、整体療術・鍼治療・マッサージ治療の効果が、3群でどのように違うかをくらべるランダム化比較試験の論文が、一般社団法人 日本鍼灸療術医学会より発表された。整体療術についての研究が国際的な学術雑誌に取り上げられるのはこれが初である。この論文で整体療術に客観的な効果のあることが確認され、医学的な効果が存在することが示唆された。また、整体療術群では他の2群に対して有意に筋緊張と VAS (Visual-Analogue-Scale) などの低下が観察された。

歴史

日本の柔術をはじめとする武術の中で「活法」・「骨法」として受け継がれてきた手技療法、伝統中国医学の推拿などの手技療法、大正時代に日本に伝わったオステオパシーやカイロプラクティックなどの欧米伝来の手技療法と、当時の施術家たちの独自の工夫や独自の思想などを加え、集大成したものが現在「整体」と呼ばれるものである。整体創設の初期には整体のことを、「正体」・「正體」・「正胎」・「整胎術」などと呼んでいた。これらの自己改善療法が、野口晴哉により「整体」と呼ばれるようになった。現在では野口の整体法は「野口整体」と呼ばれている。現在も整体は各営利団体によって更に変貌を続け、様々な独自の手法、独自の思想、独自の理論が展開されており、これらを統一した手技療法とすることは困難であるとされる。

施術の特徴

整体とは、体全体の骨格を形作る関節（脊椎・骨盤・肩甲骨・四肢・顎関節等）の歪み・ズレの矯正と、骨格筋のバランス調整などを、主に手足を使った手技（道具は、あくまで補助として使用する）で施術することで体を整え、体幹から四肢への脈絡の流れを良くし、脈絡改善によって各症状の改善を期待する健康法であると言われている。

整体師の施術は、国家資格である柔道整復、あん摩、マッサージ、指圧とはまったく異なるものである。その施術は末梢が対象ではなく、中枢を対象にした施術である。施術自体は（整体）操法、整体療術とも呼ばれる。上記の国家資格である柔道整復・あん摩・マッサージ・指圧との違いが分かりにくいとの声もあるが、その技術体系はまったく異なる。

国家資格療術業との軋轢

整体師が医業類似行為を業として行うことに対して、1960年最高裁判所昭和35年1月27日大法廷判決が「憲法22条は何人も公共の福祉に反しない限り職業選択の自由を有する」ことを保証している。これが半世紀を経た今日まで「人の健康に害を及ぼすおそれがない以上、法律に違反しない」ため、業として行うことの実上の根拠となっている。

しかし、主に国家資格者であるあん摩マッサージ指圧師・はり師・きゅう師や医療従事者からは、「骨折や脱臼、神経麻痺などを起こすおそれがある。また、悪性腫瘍などの重大疾患が隠れているような場合に、医療機関への受診遅れにもつながりかねない。したがって、整体は「人の健康に害を及ぼすおそれがある医業類似行為であり、国家資格化されずにこれを行うことは国民の利益に反する。」「医業類似行為と人の健康に害を及ぼすおそれがないというのは矛盾する。良い方向へ作用するものは、悪い方向へも作用する可能性を秘めている。」などと懸念されている（後述）。

医業類似行為として

「医業類似行為」も参照

医業類似行為を行なって良い者は、あん摩マッサージ指圧、はり、きゅう及び柔道整復である（あん摩、はり、きゅう、柔道整復等営業法第一条／第十二条）。それ以外の療術業は昭和二十三年四月一日迄に開業届を出した者だけである（あん摩、はり、きゅう、柔道整復等営業法第十九条）。

「あん摩マッサージ指圧・はり・きゅう・柔道整復」以外の医業類似行為については、「当該医業類似行為の施術が医学的観点から人体に危害を及ぼすおそれがあれば、人の健康に害を及ぼす恐れがあるものとして禁止処罰の対象となる」とされている。

整体師は医師でないため、「医師」の名称使用は法で禁じられている（医師法第十八条）。ドクターの名称についても医師との紛らわしさを防ぐために、医療系のドクターでない旨専門分野を明らかにして表記しなくてはならないと厚生労働省の通知がある。

整体師は医師ではないため、「病院」「療養所」「診療所」「診察所」「医院」、その他病院又は診療所に紛らわしい名称を付けることは法で禁じられている(医療法第三条)。

整体師は医師法に定める医師ではないので診断を伴う診察を行うことはできない。具体的には医学で使用されている病名を判断してはならない(「胃潰瘍である」とか「腱鞘炎である」など)。また外科的手術、注射、はり、灸、マッサージ、麻酔、レントゲン撮影、さらには血圧を測ることも医師法など医療関連法により禁止されている。

整体師は薬剤師ではないので医薬品を調合出来ない。

整体師は医師でないので投薬や服用の指示は出来ない。

整体師は、あん摩マッサージ指圧師、はり師、きゆう師及び柔道整復師ではないので、当該国家資格を持たない限り、あん摩・指圧・マッサージ・はり(鍼)・灸・接骨、整骨等は、あん摩、はり、きゆう、柔道整復等営業法第一条/第十二条、あはき法第一条/第十二条、柔整師法により禁止されている。

整体師は公的な資格ではない。昭和二十三年四月一日迄に開業届を出した者以外は医業類似は認められていない(あん摩、はり、きゆう、柔道整復等営業法第一条/第十二条/第十九条)。治療類似行為を行い、それが著しく好ましくない結果をもたらした場合、刑法の定める業務上過失傷害罪などに問われる。

施術実績などの広告を出すこと、効果のある病名を掲示すること、「○○流□□派」などの流派の誇示は、あはき法第七条によって禁止されている。

整体技術に対する見解について

厚生労働省では、「整体は指圧の類ではないか」との疑義照会に対して、昭和47年7月9日付旧厚生省医務局長からの回答で『整体は脊椎等の調整を目的とする点において、あん摩、マッサージ又は指圧と区別される。従って、あん摩、マッサージ又は指圧に含まれないものと解する』と回答している。しかし、特にチェーン展開のスーパー銭湯内の整体店などで多く見られるが、法逃れの為に整体の看板を隠れ蓑に客を寝かせ安易にアルバイトが背中や腰を押すだけと言った、実質的にマッサージ行為を行っている違法の悪質業者も多く散見するのも事実である。

禁忌対象疾患

整体術(カイロプラクティックなど)の対象とすることが適当でない疾患として、厚生労働省通達において、腫瘍性、出血性、感染性疾患、リュウマチ、筋萎縮性疾患、心疾患等とされている。さらに、椎間板ヘルニア、後縦靭帯骨化症、変形性脊椎症、脊柱管狭窄症、骨粗しょう症、環軸椎亜脱臼、不安定脊椎、側彎症、二分脊椎症、脊椎すべり

症などと明確な診断がなされているものについては、注意が必要である。(以上に挙げられた病気は、現代医学でも完全に治すのは難しいのです。従って本当の病気にはカイロプラクティックも整体も手を出すことを許さないのです。何回も指摘しておきますが、漢方や鍼灸は絶対に代替医療ではないのです。現代医学よりもはるかに優れた医学が中国医学であり、東洋医学であり、漢方医学なのです。なぜならばこれらの医学は人体が持って生まれた免疫の働きを確実に上昇させてくれるからです。一方、今まで論じてきたキネシオロジーや O-リングテストやホメオパシーやカイロプラクティックなどは、免疫とは直接関係がないからこそ代替医療といわれるのです。

それではなぜ最高の医療といわれる西洋医学があるにもかかわらず代替医療が生まれたのでしょうか？西洋医学を代替するために生まれたのですが、西洋医学の欠陥となっている部分は何であり、どのようにしてそれを補い、その代わりを果たしているのでしょうか？これに対しては今まで勉強してきた **Wikipedia** の授業には出てきませんでした。私が代わりにその答えを出してあげましょう。

何回も述べていますように、有史以来、人類を死に追いやった病気は全て感染症であったのです。今や感染症が抗生物質とワクチンによって制圧され、かつ医学の発展が最高度を実現されたにもかかわらず。死なない病気がいつまでもいつまでも続いています。あちこちの大病院に様々な検査を行い、様々な治療を行い続けているにもかかわらず、死ぬわけではない病気が増えるばかりです。毎年毎年1兆円ずつ医療費が増え続けます。今年は42兆円を超えるといわれています。いくら金をかけても病気が治らないこのような現代の医療に絶望した人たちが、何とか自分の愁訴、つまり体の不満を良くしてもらうために、徐々に徐々に新たに民間に生まれたのが整体であり、カイロであり、O-リングであり、キネシオロジーであったのです。実はこれらは代替手技と呼ぶべきであって、代替医療と呼ぶべきではないのです。なぜでしょうか？

本来医学とは病気の原因を明らかにし、その原因を除去するために38億年かかって進化した免疫学の理論を明らかにするために医学が生まれたのです。免疫学の理論が出来上がっていない時代に生まれた医学は、実は医学ではないことを知っておいてください。本当の医学は、免疫学を熟知した上で、患者の生まれ持った免疫を高めて、患者にその病気を治させるための免疫を上げる薬を作り、その患者をヘルプするために免疫の理論を実践することであり、それを実践するのが医者であります。その医者の行為を医療といいます。従って病気の原因も分からずに、何となくぼんやりと手を下すことは医療とは言えないのです。従って上に述べた様々な手技を代替医療というのは間違っているのです。せいぜい代替手技というべきです。

それでは現代の世界中で行われている医学は果たして本当の医学といえるでしょう

か？もちろんエセ医学というべきです。なぜならば現代の病気の原因は化学物質とヘルペスであるにもかかわらず、その原因を世界中の医者は誰も指摘することがなく、ほとんどの病気の原因が不明であると言いながら、治療しますと断言し、アホの一つ覚えのように免疫を抑える行為しかやらないので、病気が治る訳がないからです。従って現代の西洋医学は医学というよりも宗教というべきです。もっと正確に言えば、病気を治せない宗教と言えます。なぜならば病気を治すのは 38 億年かかって進化した免疫の遺伝子だけですから、その遺伝子の働きを抑えるステロイドをはじめ、あらゆる種類の免疫抑制剤を使う限り、絶対に治らないどころか、一時的に良くなっても永遠に病気が深刻になり、新たな遺伝子病が増えるばかりです。

このような免疫学の真実を知らない民間人の中に、西洋医学の治療を受けても患者が増えるばかりであることだけは確実に知った人たちの中に、西洋医学の治療をやめて、免疫学の理論を知らずして新たに作り出したのが上に挙げた様々な代替医療であるのです。従って免疫学の神髄も何も知らない直感に優れた民間人が作り上げたのが代替医療といえます。少なくとも代替医療というのは、現代西洋医学のように目的的に免疫を抑えて一時的に症状を取るという考えもないので、現代医療よりも優れているといえるかもしれませんね、アッハッハ！代替医療を受けている患者はカイロプラクターや整体師に優しく接してもらっただけで心が慰められ、慰安は充分与えられるので安心できるので、治療費を払うのでしょ。

免疫学が全く存在しなかった 18 世紀以前の人たちは呪術医学をしていたのですが、まじない医学をやっている人も患者の患部を触ったり抑えたり撫でたりすることによって、いわば無意識の代替医療をやっていたことでしょう。現代の代替医療を行っている人と、スキンシップを含めた呪術医学をやっていた人との違いは、悪霊が病気を作った分けではないということを知っているか知らなかったかの違いだけであり、また人体解剖学を知っているか知らなかったかの差だけなのでしょう。現代でもインドネシアやアフリカなどの発展途上国の村落では、古代的な整体呪術医学が今なお堂々として行われています。彼らは免疫の遺伝子を変えることによって現代の西洋医学の医者のように、新たな病気を作っていないだけでも優れた医者といえるでしょう。アッハッハ！

現代の病気は知らず知らずのうちに競争社会のストレスに耐えるために作り出したステロイドホルモンによって自分の免疫を抑えて病気を作ります。そしてその病気を治すのも自分のステロイドホルモンを減らすことになり自分の免疫でしか治せないのです。現代西洋医学はステロイドで作られた病気、とりわけ膠原病をさらにステロイドを入れて永遠に免疫が働かないようにして死ぬまで治らない病気に仕立て上げているのです。悲しいですね！)

次はアーユルヴェーダについてです。

アーユルヴェーダはインド大陸の伝統的医学で、その名は生氣、生命を意味するサンスクリット語の「アーユス」と知識、学を意味する「ヴェーダ」の複合語である。（今日の英字新聞の“インターナショナル・ニューヨーク・タイムズ”の記事に書かれていました。この前のインドの選挙で選ばれたモディ新首相はヒンドゥー教徒であり、サンスクリット語を復活させようと考えているようです。インドの9億の人口のうちサンスクリット語だけを公用語として使っているのはたった14000人だけであるとも書かれていました。）現代西洋でいう医学のみならず、生活の知恵、生命科学、哲学の概念も含んでいる。（古代の人たちは医学も哲学も宗教も科学も、何一つ明確な概念を持ち合わせることはできませんでした。当然のことです。それはちょうど中国医学の陰陽五行説にも見られるように、医学の出発点は哲学から生じたのと同じことです。今なお日本や中国や韓国で行われている漢方医学も、まるで漢方が病気を治すような言い方をしているぐらいですから、アーユルヴェーダも混沌とした哲学から生まれたのは当然のことです。現代の医者達さえ病気を治すのは自分の免疫の遺伝子しかないことを知らないのですから、当然のことです。

それでは現代医学は医学という名に相応しいでしょうか？違います。実は医学という名のついた宗教といえます。どうして医学という名がつけられるかという、お金を儲けるのに都合の良い一部の医学を駆使して、免疫を100%抑える薬を作り出し、愚かな大衆に症状だけを一時的に取ることで満足させてあげて、一生治らなくさせただけからです。一方で、病気を治している訳ではないので宗教と変わらないといっているのです。つまり現代医学は「完璧な医学宗教」と名前を変えるべきです。）約五千年の歴史があり、チベット医学や古代ギリシア、ペルシアの医学等にも影響を与えたといわれており、インド占星術とアーユルヴェーダも深い関わりがあるとされている。「ヴァイシェーシカ」や「サーンキヤ」を基礎にしている。

現在、世界各地で西洋医学の代替手段として利用されている。（現代の西洋医学の方を、「病気を治せない代替医学」というべきであり、今言われている代替医学は「知らず知らずのうちに、患者に病気を治させている医学」と言うべきです。病気を治す力は、いわゆる代替医学の方がはるかに西洋医学よりも優れているからです。もちろんワクチンと抗生物質と抗ヘルペス剤を除きますが。）

健康の基本的な考え方

心、体、行動や環境（西洋医学の父といわれるヒポクラテスも重視した）も含めた全体としての調和が健康にとって重要とみる。（病気を治すのに心が大事だということを、BC5世紀のギリシャのヒポクラテスもステロイドホルモンを知らずして直感していたわけですから、ヒポクラテスは医聖に相応しい人です。古代から今も変わらず、人間の一番怖い敵はウイルスであり細菌であります。しかも自分たちが食べていた食物や水に天然の異物が入っていることを知らなかったのが、天然の化学物質が異物となり、これも敵となり、その当てもアレルギーや膠原病は存在していました。もちろんヘルペスウイルスが古代の人の人体の神経にたくさん増殖し、あらゆる神経の神経節に密かに隠れていたのが、古代人も現代人と同じくヘルペスウイルスで苦しんだのです。ヘルペスについてはヘルペスのコーナーを読んでください。

皆さんは、昔の人の病気と今の人の病気の原因が全く違っているとお思いでしょうが、本質的には何も変わらないのです。ただ一つ大きな違いがあります。それは文明が作り上げた人工化学物質が昔の人の何万倍も取り込まれていることです。古代人が取り込んだ化学物質はたまたま摂取した天然の食べ物に含まれていただけなのです。現代人はこの文明が作り上げた大量の人工化学物質を、体外にアレルギーと膠原病という形で毎日毎日排除しようとしていることだけが一番大きな違いなのです。もちろん言うまでもなく、ステロイドをはじめ免疫抑制剤は昔は一切なかったので、新たなる後天的人工遺伝子病という病気は生まれることはなかったのです。さらに付け加えれば、昔の医学と現代の医学の違いは、昔は抗生物質とワクチンがなかったのが一番大きな違いです。）アーユルヴェーダでは病気になってしまってからそれを治すことより、病気になりにくい心身を作ること、病気を予防し、健康を維持するという「予防医学」の考え方に立っている。アーユルヴェーダは人間の身体を構成するパンチャブータ（五つの幽霊という意味。水は土を突き抜けていくように、古代インドでは、物質は見た目だけの粗大な構造物だと考えられていた。）（まさにインド医学の出発点は五つの幽霊から始まったのです。つまり哲学がアーユルヴェーダ医学の基礎であったのです。）つまりプリティヴィー（土）、アープ（水）、テージャス（火）、ヴァーク（風）、アーカーシャ（空間）の形而上学に基づいて作られている。（以前にも私は指摘したように、古代の医学の全ては形而上学的認識に基づいてきたのです。形而とは、形があるという意味です。形而上という意味は、時間・空間の中に形がなく、従ってそれを感覚的な現象として認識できず、超経験的な理性的な思惟によってのみ認識できる、つまり形而を超えたという意味です。形而上学とはまさに哲学のことです。一方、形而下という意味は、形を持って

いるものであり、自然一般に存在するものを感性、つまり見たり聞いたりすることができるといえる意味です。現代の医学はまさに形而下の学問であります。従って形而下の学問というのは形の下にもものがあるという意味であり、つまりそれを認識するのは科学であります。ところが今の医学は、本来は科学であります、医者が儲かる部分だけを見る科学であります。つまり症状という形而下の現象をなくすだけで大衆は満足するからです。現代科学は小さすぎて目に見えなかったり、小さすぎて聴覚に認識されない音も、現代科学によって全て認識でき、かつ免疫の働きも細胞レベルや分子レベルや遺伝子レベルで全て可視化できるにもかかわらず、古代人と同じように全く気づかないようなフリをして、免疫の遺伝子の働きを抑え込んで病気を作り続けているのです。従って現代医学は、自分たちに都合のいいことは形而下の医学に仕立て上げ、都合の悪いことは形而上の医学、つまり哲学に仕立て上げてお金を稼いでいるのです。悲しいことです。）これらのより良いバランスを保つことにより、より具体的には、トリドーシャ（3大基本エネルギー要素の意）つまりヴァータ（気質：風と空気の複合元素）、ピッタ（胆汁酸：火と風の複合元素）及びカパ（痰：水と土の複合元素）のバランスが取れていること、各ダートゥ（肉体の「7つの構成要素」の意）がきちんと消化されていること、不快な状態がないことなどが健康の条件となる。（このようなバランスの取れた状態を、現代の言葉でホメオスターシスといいます。この現代のホメオスターシスの概念は、19世紀にフランス人のクロード・ベルナルによって提唱されたのです。ベルナルの概念は「外部環境は極めて変化に富んでいるにもかかわらず、内部環境は一定の状態に保たれている。この内部環境が一定に保たれていることが生命の維持と機能の発現に重要である」というものです。この概念を20世紀のはじめにさらに発展させたのがフランス人のキャノンであります。このキャノンがホメオスターシスという用語を作りました。つまり生体の恒常性の維持を示す言葉です。このようなホメオスターシスの状態は心のストレスが長く続くとホメオスターシスのバランスが維持できなくなり、健康を害して病気になるとキャノンは主張しました。5000年前のアーユルヴェーダの概念とキャノンの概念が全く同じだと思いませんか？皆さんは、古代の医学は現代医学に比べて桑めて劣っていると考えていませんか？実は基本的な医学に対する考え方は変わらないのです。ただ違いはひとつ、免疫学が発達しワクチンと抗生物質を作ったことが、最大の違いだといえます。病気を治すという点においては、現代の医学の大部分は古代の医学よりも劣っていることは、もう既にご理解いただけたことでしょう。アッハッハ！）

今日はここまでです。2014/06/19

トリ・ドーシャ（3つの元素）

トリドーシャ（3つのドーシャ）説は、鉱物、植物、動物、人間および環境世界はヴァータ・ピッタ・カパという3要素を持っているとする説。（この考え方は中国医学の五行陰陽説に少し似ていますね。人間は見えないものを、つまり五感で感じ取れるもので説明しようとする通性を持っているといえます。というよりも、人間が外界を確実に認識できる方法は5つの感覚を認識できる5つの感覚器官によってしかないからです。その5つとは、視覚（目）聴覚（耳）嗅覚（鼻）味覚（舌）触覚（皮膚）の5つであります。仏教ではこの五感を、五根とか五官とかといいます。医学の始まりも宗教の始まりと軌を一にしております。宗教も医学もとどのつまりはこの五感を通じて生まれたのは当然のことです。言い換えると、人間が外界を正しく認識する手段は、この5つの感覚を脳に伝えて初めて可能となるのです。この五感に認識できない事象を、何とか理解しようとして生まれたのが想像力であります。この想像力から宗教も医学も生まれたのです。従って昔の医学は宗教医学とならざるを得なかったのです。原初の医学は宗教医学そのものです。

それでは体内に入った異物をどのようにして免疫は認識しているのでしょうか？お分かりのように、今述べた五感とは全く関わりがないのです。さあ、面白い疑問でしょう。その答えは何だと思えますか？考えてください。内外の森羅万象は五感で認識できるのですが体内において生じる現象は何によって認識され、支配されているのでしょうか？答えはただ一つ、免疫の遺伝子の働きによってであるとしかいいえません。この免疫の遺伝子が人体に侵入した目に見えない敵を処理するために病気を引き起こしているということが分かったのも、実はつい最近の話です。最初に中国で中国医学を作った人たちやインドでアーユルヴェーダを作った人たちや、後でコメントするアラブのユナニ医学を作った人たちにとって、免疫も遺伝子もくそもありません。何一つ免疫も遺伝子も分からなかったのです。従って彼らは五感で認識できる病気を五感だけでは説明しきれないので、色々と想像力をたくましくしてアーユルヴェーダ医学を作ったのです。

それでは現代医学は宗教医学ではなくて、科学医学といえるのでしょうか？これも間違いです。現代医学は算術医学と命名すべきです。現代医学は、科学の力によって遺伝子の働きまでも可視化できるようになったにもかかわらず、しかも38億年かかって作り上げた命を守る免疫の働きもほとんど全て知っているにもかかわらず、しかも免疫の遺伝子しか病気を治せないと知っているにもかかわらず、その遺伝子を変える研究を莫大な金をかけてしているにもかかわらず、その遺伝子の働きを変えようという最悪なことをし続けて金を儲けようとしているからこそ算術医学というのです。

皆さん、この世に免疫の遺伝子以外に信じていることができるものがあると思いますか？この免疫の遺伝子が38億年働き続けたために私たち人類が進化し生き延びることができたのです。この遺伝子の働きを止めて金を儲けようとしています。それが再生医学という名において行われているiPS細胞やSTAP細胞などの研究であります。遺伝子を変えるという研究は必ず全て失敗するからです。病気を治すのは自分の免疫の遺伝子しかありません。この免疫の遺伝子は異物が人体に侵入しない限りは発動する必要がないのです。異物が何であるかを探し出すことだけが医学の研究であるのです。にもかかわらず原因不明の病気が万を超えます。自己免疫疾患などは絶対にありえない病気なのです。にもかかわらず自分の免疫が自分の成分を攻撃していると言い続けるのです。本当に悲しい話です。自己免疫疾患がないことは自己免疫疾患がないというコラムを読んで下さい。現代の病気の原因は化学物質とヘルペスウイルスしかないのです。

さらに付け加えれば、現代医学は算術医学だけではなく、もっとたちが悪い医学です。というのは、異物と戦う免疫の遺伝子の発動を抑えることによって、新たなる人工的遺伝子変性症という病気を作りまくっているのです。遺伝子は無理やり薬で変えられてしまうと、必ず遺伝子の発動を変えられてしまった遺伝子は、死ぬか、癌になるか、修復するか、異常な細胞になって生き残るかの、4つしか対応できないのです。この4つの遺伝子の変化はまさに病気そのものです。癌になるということは、まさに全ての人間が恐れる最大の病気であり、遺伝子変えられることによって死んでいく細胞はまさに細胞自殺であり、人間が癌よりも恐れる病気です。正常な遺伝子が異常にされてしまうと、訳の分からない病気を起こすことになります。数多くの遺伝子は再び異物との戦いを始めるので、リバウンドというはじめの病気よりも恐ろしい戦いを再開し、苦しみが何倍もひどくなるので、まさに生き地獄を生みだしてしまいます。これが現代の難病を作り出しているのです。

難病というのは薬や医者が作った病気であります。この世に免疫の遺伝子が治せない病気は何一つとしてないのです。だからこそ現代医学は算術医学のみならず、造病医学と名付けるべきものなのです。過去の医学は宗教医学であるといえますが、現代医学は科学的宗教医学であり、かつ造病医学と断言できます。悲しいことですね。

昔の医学が恋しくてたまりません。なぜならば昔の宗教医学は免疫を抑えることを一切しなかったからです。一方、現代は病気を作る原因、つまり感染症を引き起こす原因がなくなったうえに、免疫が負けてしまうようなウイルスや細菌は全てワクチンと抗生物質によってたいらげられてしまったので、医学が必要でなくなってしまうました。さ

らにつけくわえれば、このような敵が体外に住むことができなくなるほど環境が衛生的になり、かつ衛生行政や衛生意識の向上によって住みつくことができなくなったので、ますます医者や薬が必要でなくなったのです。にもかかわらず現代医学が免疫を抑えることによって新たな病気を作り出しています。)

人間は個人により3要素の強さの違いがあり、性格や体質の違いとして現れるという。また、それに合わせた食生活、病気の治療法があるという。各ドーシャにおいて、ヴァータは「空・風」、ピッタは「火」、カパは「水・地」、を表している。ドーシャは1日のなかでカパ、ピッタ、ヴァータの順で変化のサイクルがあり、1年のなかでもサイクルがあり、人の一生の中でも変化する。また、食べ物や行動などでも変化する。(このような考え方はまさに低級な小説を聞かされているような気がしませんか？ワッハッハ！しかし現代の科学宗教のように免疫を抑えることはしていないので、その意味で無知なる素晴らしい医学だったといえます。今なおインド人に聞くとアーユルヴェーダを信じている人が何億人もインドにいるようです。)

サプタ・ダートゥ (7つの構成要素)

- ・ ラサ (血漿)
- ・ ラクタ (乳糜、にゅうび)
- ・ マーンサ (筋肉)
- ・ メーダ (脂肪)
- ・ アスティ (骨)
- ・ マッジャー (骨髄)
- ・ シュックラ (生殖組織)

食べ物は以上の順で代謝されていくという。そして最終的に、オージャス (活気) となり、生き生きとした健康な状況を生み出すとする。(これらのカタカナ語は全てヒンディ語(ヒンドゥー語)です。ヒンドゥー語はインドの連邦レベルでの公用語であります。国レベルの公用語は英語であることはご存知でしょう。このヒンドゥー語はサンスクリット語の影響を受けて生まれたもので、ヒンドゥー教徒が使う言葉であります。ヒンドゥーという言葉はペルシャ語で「インダス川の流域の人々」という意味であり、後に「インド人」の意味となりました。従ってヒンドゥー教はインド教ともいわれており、インド国民の8割が信じている宗教です。ネパールではヒンドゥー教が国教となっています。仏教が起こる前からインドにあったバラモン教から生まれた宗教であり、各地の土着の信仰を取り入れてAD4世紀頃に確立したものです。その後大乘仏教の影響を受けて、

5世紀から10世紀に向けて発展したのですが、イスラム教やキリスト教もインドに入るようになってから一時衰退しました。ところが19世紀に宗教改革運動が起こってから再び隆盛するようになりました。

ヒンドゥー教は事物を崇拝したり全ての物に靈魂があると信じるアニミズムや、さらに祖先崇拝や偶像崇拝などの様々な要素を含み、多くの宗派に分かれています。とにかくインドの宗教の歴史や、その思想や、その流れを勉強することは、小説を読むよりはるかに面白いものです。なぜならば、その宗教を信じ実践してきた人間が形作った社会がインドであり、様々な宗派のヒンドゥー教が社会制度、法制度、風習など生活全般に関わっているからむちゃくちゃ面白いです。しかしここで全てを語ることは無理ですから、興味のある人は自分で勉強してください。

私は実は医学よりも宗教の方がはるかに面白いと思っていますが、今なおアラブでは同じマホメット教徒であるにもかかわらず、シーア派とスンニ派が殺し合いをしています。この世に時間と遺伝子以外に神は存在しないことを知っている私にとって、彼らがこの世に存在しない架空のアラーやイエス・キリストや、インド人が信じているヒンドゥー教の最高神であるヴィシュヌ神やシヴァ神が創造の産物に過ぎないにもかかわらず、宗派が異なるということで憎み合ったり殺し合いをしたりすることは想像さえできません。だからこそ、有りもしない神を巡って過去も現在も血を流し続けている人間の存在が一体何なのか知ることは医学よりも面白いと思っています。もちろんそんなことを勉強しても全く無駄であるということも分かっていますが、小説を読むよりは価値があることでしょう。いずれにしろ人間がいかにかの悪い愚かな存在であるかを知るだけです。69歳の死に損ないのおじんが今更勉強する意味もありませんね、アッハッハ！人間のつまらなさを教えてくれるのは宗教か小説かどちらでしょうね？ワッハッハ！)

これらのダートゥを変換するためにはアグニ（消化の火）が働く。アグニが正常に働かないとアーマ（未消化物）が生成され、またマラ（老廃物）の生成と排泄に異変が起きる。

診断

診断を大きく分けると、

- 問診（プラシュナ）
- 触診（スバルシャナ）

- ・ 視診（ダルシヤナ）
- ・ 聴診（サブタ・パリクシャー）

に分類できる。（このあたりは現代医学の四診と似ています。しかし私は最近この四診さえもする必要がないと考えています。なぜならば病気は原因がなければ絶対に起こりませんし、かつその病気を治すためには、その病気の原因を知らなければ治せません。従って病気の原因を知るのに、問診（プラシュナ）触診（スバルシヤナ）視診（ダルシヤナ）聴診（サブタ・パクリシャー）の4つは必要かどうかという問題です。

21世紀の病気の原因は、化学物質とヘルペスウイルスと風邪のウイルスといくつかの細菌しかありませんから、患者さんに問診をすることは、病気の原因を知るためにどのような症状であるかを聞くことだけであり、原因を追究する手がかりを与えてくれるからです。さらに前医にどんな間違っただ免疫を抑える薬をどれだけ多くどれだけ長く使われたかが一番大事な質問となります。なぜならば、免疫の遺伝子の修復、つまりリバウンドがどれだけひどくなるかを知る必要があるからです。あらゆる病気のうち最も難病であるのは、医者の間違った治療の後でリバウンドを起こしてしまう医原病であります。医者が免疫を抑える薬を使わない限りは、滅多に堪え難いリバウンドは滅多に生じないのですが、残念ながら当院に来られる前に医者信じすぎた患者ばかりですから、私はこの30年間難病ばかりを診たこととなります。患者さん自身が現代の医療が間違いであることを気づくのが遅すぎるので、残念ながら難病は増えるばかりです。

さらに病気の原因が分からないにもかかわらず病気の診断をすることは全く意味のないことであり、原因が示唆されないような病気診断や病名診断は言葉の遊びです。医者の名前がつけられている病名が多すぎます。診断病名と人の名前は全く関係ないので。現在、公式に認められている病名は22000種類もありますが、こんなつまらない病名は全て原因病名に変えるべきです。医学が発達するということは、病気の原因を知ることができるようになったということです。21世紀の病気の原因は化学物質とヘルペスウイルスだけですから、ほとんどの病名は2つの名前だけで済みます。さらにその病気と戦っている患者の武器が何であるかも付け加えても良いと思います。その武器はIgEやIgAやIgGなどであります。さらに付け加えるべきなのは、その敵と戦っている主な細胞の名前を加えても良いでしょう。例えば大食細胞、好中球、NK細胞、キラーT細胞などあります。原因も分からずに治療と称して医療行為を行うのは、まるで必ずハズレ券となってしまう宝くじをひいているようなものです。なぜならば現代の医者が投与している薬は、全て病気を治せる免疫の邪魔をしているだけですから、必ずハズレ券になるのです。アッハッハ！

さらに病気は免疫と異物との戦いですから、必ず免疫は異物を処理する力があるので、原因が分からないときにやるべきことは、免疫を手助けすることだけが正しい唯一の治療になります。にもかかわらず現代の医者は患者に病気の原因を絶対に告げないで、症状を取るだけの免疫を抑える化学物質を投与しているだけです。こんな医者は要らないのです。炎症であるということだけを伝えて、専ら病気を作り続ける免疫を抑える薬を出すだけであり、病気を治らないようにさせていることになるだけです。体に悪いことをしていることになります。現代の治療は全てやめるべきなのです。だからこそ私は医者や薬が病気を作っていると言い続け、免疫を抑える薬を出す医者は病院は要らないと言っているのです。病気を作る医療がなくなれば、日本の1100兆円を超えた天文学的な財政赤字も簡単に消えてしまうのに、安倍総理は何も気づいていないようです。この世に治らない病気とか死ぬような病気はないのです。なぜならば患者の免疫で治せない病気はなくなってしまったからです。遺伝子病は病気でないので永遠に治すことはできないのです。あえて言えば、遺伝子病はその人の個性といってもよいものです。

それではアーユルヴェーダ医学をやっているインドの医者は四診によって何を診断しようとしているのでしょうか？一度インドの医者に会う機会があれば聞きたいものです。もちろん答えは分かっていますが。）

視診には、舌診（ジフワ・パリクシャー）、眼での診断（ネトラ・パリクシャー）など、触診には、脈診（ナーディ・パリクシャー）、他に便や尿、痰などの排泄物でも診断を行う。

浄化法・治療法

アーユルヴェーダの浄化法は可能な限り身体に負担を掛けないように時間を掛けて、過剰なドーシャやアーマを身体外に排泄させるために1.前処置→2.中心処置→3.後処置の順番で施される。（漢方医学は排泄の医学といってもいいのです。やはりアーユルヴェーダも毒素、つまり異物が病気を起こしているということを五感ではなく第六感で判断していたのです。第六感とは、五感の他にがあるとされる感覚で、物事の本質をつかむ鋭い心の働きといわれますが、私の定義は次のようです。「五感で認識された事象を知らず知らずのうちに正しく論理的に処理する能力」であります。）

1. 前処置 プールヴァカルマ

- ・ アーマパーチャナアーマ（毒素）の消化法
- ・ スネハナ・カルマ油剤法
- ・ シローダーラー頭部の浄化、中枢神経の強壮、精神疾患などの治療

- アビヤンガ (= Abhyanga とは塗布する意・オイルマッサージのこと) 塗布するオイルの種類によって目的が違う
- ピリツイル (スネハナカルマ + スウェーダナ・カルマ (発汗法のこと) / 王様の治療法と呼ばれ、熱い数リットルのオイルを全身に振り掛けマッサージする。麻痺、リウマチなどの難治性疾患に効果がある)
- エラキリ (スネハナカルマ+スウェーダナ・カルマ / 関節痛、リウマチに効果がある)
- ナバラキリ (スウェーダナカルマ) ナバラライス (薬米) と Bala などの生薬と牛乳を使用する

2. プラダーナ・カルマ 中心処置 パンチャカルマ

- ヴアマナ (催吐法・主に胃・肺・食道・喉の浄化を目的とする) : Vaman
- ヴィレチャナ (催下法、下剤) : Virechan
- バスティ (浣腸法) : Basti
- ナスヤ (点鼻法・主に喉・頭部・顔面を浄化する事を目的とする) : Navan、Nasya
- ラクタ・モークシャ (瀉血療法) : Rakta Moksha

3. 後処置 パシュチャートカルマ

- シヤマナ鎮静法 ドーシャのバランスとアグニの正常化
- サンサルジャナ食餌療法
- ラサーヤナ不老長寿法 生薬や鉱物で作られた薬品を摂る (Chavanapurashが有名)
- ヴァジーカラナ強精法 良い子孫を作る為の方法 ラサーヤナ同様、薬品を摂る

8部門

- 治病医学
 - 内科学 (カーヤ・チキツァー)
 - 小児科学 (バーラ・タントラ)
 - 精神科学 = 鬼人学 (ブーダ・ヴィディヤー)
 - 耳鼻咽喉科及び眼科学 (シャーラーキャ・タントラ)
 - 外科学 (シャーリヤ・チキツァー)
 - 毒物学 (アガダ・タントラ)

- ・ 予防医学
- ・ 老年医学 = 不老長寿法（ラサーヤナ）
- ・ 強精法（ヴァジーカラナ）

思想的背景

『チャラカ・サンヒター』では「バラドヴァージャ」という仙人がインドラ神に赴き、アーユル・ヴェーダを受け取ったと述べられている。『チャラカ・サンヒター』は『アタルヴァ・ヴェーダ』を根拠とし、三人の仙人が風、水、火について述べることで三元素を解説している。学術的には、チャラカ・サンヒターは2世紀頃に成立し（文献と成立年代は矛盾しているが、不祥の太古、無限遠、未来を説明する場合であっても、便宜的に数字を置く慣行がある。仏教も同様である。）、第1巻第1章はヴァイシェーシカ学派、第3巻第八章はニヤーヤ学派、第4巻第一章はサーンキヤ学派の思想が反映されていると評価されている。太古に完成したサンヒターに基づく技術のために進歩が否定されているように見えるが、実際にはアーユルヴェーダの薬草類には8世紀から19世紀の文献のものも含まれ、ムガル帝国時代にイスラム医学が取り入れられ医学的な進歩を享受するなど、太古のヴェーダの権威を残しつつ、柔軟に折衷されている。

日本での現状

近年は、ヨーガと並んでインド式美容、インド式セラピーの方法論として女性向けの雑誌・エステなどで取り上げられることが多く、人気のセラピーとして知られている。だが、語感や視覚イメージから来る神秘性、重厚さ、伝統的な雰囲気だけを利用した紛い物（まがいもの）も存在する。アーユルヴェーダではその理論に基づいた多数の生薬を含んだオイル（100種類以上・生薬1：オイル4：水16の割合で作られる）が使用されるが、日本のサロンのほとんどではシローダラー（額のチャクラに垂らす）を胡麻油やアロマオイルで行っている。

また仮に、日本国内で正式なアーユルヴェーダを実行しようとしても、パンチャカルマ（浣腸法）などは医療行為に当たるため、施すことができない。治療を行えるのは医師だけである。また最近、ネトラタルパナ（点眼）で眼病を引き起こしたり、カーナプラーナ（点耳）で難聴を引き起こす可能性があるため、これらの施術を行っているサロンは医師法に抵触している可能性がある。その他、なんらかの薬事効果や治療効果を謳った場合も同法ないしは薬事法に抵触する。厚生労働省及び保健所はネトラタルパナ（点眼）は医師法違反になるとの見解である。（これでアーユルヴェーダは終わりです。漢方医学に比べるとたいしたことはないということが分かりました。）

次にユナニ医学についてです。

ユナニ医学とは、現在もイスラーム文化圏で行われている伝統医学であり、古代ギリシャの医学を起源とする。中国医学、アーユルヴェーダとともに、世界三大伝統医学のひとつとされる。ユナニ医学、ユナニ医学、ユナニティブ、ギリシャ・アラビア医学、グレコ・アラブ医学などともよばれる。「Yunan」ということばは、ペルシャ語で「ギリシャ」(Ionia) という意味で、「Yunani」とは「ギリシャの」または「ギリシャ (Ionian) を源にするもの」という意味である。(Ionia (イオニア) というのは、古代ギリシャの植民地であった小アジアの西部とエーゲ海東部の数多くの島々までを含む地方全体をいいます。小アジアというのは、別名アナトリアともいわれ、地中海とエーゲ海と黒海に挟まれた西アジアに属するアナトリア半島の地域です。小アジアの古代ギリシャの中心都市が現在のトルコのアジア側の大部分を占めています。興味のある人は地図を開けてトルコ周辺を見てください。

このギリシャ時代の古代イオニアの最強都市国家がミレトスであります。このミレトスはギリシャ文化の最初の中心地であり、ギリシャの最初の自然哲学者であるターレスやアナクシマン드로スやアナクシメネスが生まれました。彼らは宗教的・神話的なものの見方から解放され、世界全体の根本原理は何かという問いを出し、それに対して独自に答えを出そうとした点で、西洋哲学の祖とされる人物達です。彼ら3人をミレトス学派ともいいます。この3人にイオニアのエフェソスに住んでいたヘラクレイトスを加えた4人をイオニア学派といいます。世界史で学んで知っておられるように、ヘラクレイトスは「万物は流転して止まることがなく、絶えず生成する」という哲学思想を根本原理としたことを覚えておられるでしょう。このような哲学から様々な医学に対する考え方も生まれたのですが、医学を哲学から切り離れた人物がすぐ後で出てくるヒポクラテスといえます。つまり科学としての医学を最初に確立したのがヒポクラテスであったのです。) イスラム医学、イスラーム医学と呼ばれることもあるが、イスラーム世界で発展したとはいえ、ネストリウス派キリスト教徒やユダヤ教徒など、多くの異教徒の学者も功績を残している。また、民族的にも非アラブ人であるペルシャ人 (イラン人) やトルコ人、インド人、ギリシャ人、エジプト人、シリア人の医師たちも活躍したため、厳密には「アラビア人の医学」でも「イスラームの医学」でもなく、広くアラビア世界、イスラーム文化圏で発展した医学を指す。10世紀に確立し、イスラームの拡大とアラビ

ア語の普及に伴い、ヨーロッパやインドでも広く行われた。ヨーロッパの大学では、15～16世紀には主にユナニ医学が教えられており、18世紀までイブン・スィナー（Avicenna, 980-1037）の『医学典範』など、ユナニ医学の文献が教科書として使われていた。（イブン・スィナーはアビセンナともいわれる人です。彼は11世紀の医師であり、詩人でもあり、哲学者でもあり、自然科学者でもあり、政治家でもあった万能の天才でした。彼はギリシャ・ローマの医学を吸収しながら、初めてアラビア独特の医学を作り上げたので、「医学の国の王子」とも呼ばれたのです。アビセンナが書いたこの『医学典範』は医学史上最も貴重な書物とされ、ギリシャ・ローマの古代医学をまとめたものであり、1000万語を超える5巻からできていました。この『医学典範』は1650年頃まで西ヨーロッパの医学校で使用され続けました。彼はアラビアのガレノスと称されました。ちなみにガレノス（AD129～AD199）は小アジアのペルガモン生まれの医学者であり哲学者でありました。ローマに住みつき、ギリシャ由来の医学を集大成し、解剖学や生理学の基礎を築き、中世を通じルネッサンスに至るまで医学の最高権威とおがれた人です。）

ギリシャ医学を受け継ぎ、自然治癒と病気の予防を重視している。（ギリシャ医学は古代ギリシャ時代のコス島生まれの医師であるヒポクラテス（BC460～BC375）が、BC4世紀に完成させた医学であります。彼はそれまでに会った様々な学派の医術の短所と長所を批判的に取捨選択し、観察と経験を通じて科学としての医学の理念と方法を確立した人です。従ってヒポクラテスは医学の父ともいわれ、医学史上最も医大な人物であるのみならず、今日の医師や薬剤師のあるべき姿を教えた医学者といえます。彼はそれまでの病気についての宗教的な迷信を退け、病気を自然現象として捉え、病気を治癒させるのは人の自然であり、医術はそれを助長することであると説いたのです。自然は病気の医者であると述べています。まさに彼の医学は、私の21世紀の医学と何も変わるところがないのです。しかし悲しいかな、ギリシャ時代に免疫学が全くなかったのも、もちろんワクチンや抗生物質を作ることは完全に不可能でありました。彼はさらに病気は自然の原因を持っており自然の現象であるとして、それは神や悪魔の仕業であるものではなく、自然の傷害によるものであると考えました。実は自然の傷害ではなくて免疫と異物との戦いであり、敵を処理するための正しい戦いであることは当然見抜くことはできなかったのです。）生活習慣や環境を病気の原因と考え、生活指導や食材の性質を考慮した食餌療法を行う。理論としては体液病理説がベースにあり、ガレノス医学を受け継ぎ四体液説を採っている。これは、4種類の基本体液である血液、粘液、黄胆汁、黒胆汁のバランスがとれていれば健康で、どれかが優位になれば病気になるとする考え方

である。（ユナニ医学では血液、粘液、黄胆汁、黒胆汁の体液のバランスが崩れて病気になると唱えているように、中国医学では気・血・水の3つの体液のバランスが崩れて病気になるとしているのとよく似ています。しかしながらなぜこれらの体液のバランスが崩れるのかについて述べていないところが医学ではないのです。異物が侵入し免疫が働き始めて炎症が生じて、腫れ・発赤・痛み・熱・機能障害などが免疫の遺伝子の働きによって生じるものであるということが一切知る由もなかったのです。現代医学も免疫の敵となる異物が何であるかを一切明らかにしようとしません。ユナニ医学とは五十歩百歩ですね、アッハッハ！現代の病気の原因は化学物質とヘルペスウイルスであることを知っているくせに、どの医者も口にしないのです。残念です。）体液の調和を回復させるために、患者の気質と薬剤の性質を考慮し処方され、瀉血や下剤なども用いられる。アッバース朝では交易が盛んになったため（イスラーム黄金時代）、地中海や中近東地域に産するものだけでなく、世界各地の生薬が広く用いられた。西洋近代医学が台頭してからも、ヨーロッパでは19世紀まで治療に活用された。（やはりユナニ医学も中国医学と同じく、植物の生薬を用いています。古代から全人類の病気に対する治療薬として、まず植物の生薬に目を付けたのはなぜでしょうか？答えは簡単です。まず文明の発祥は農耕が可能にさせました。不安定な移動せざるをえない生活様式である狩猟採集の生活から、安定した定住の農耕社会が生まれて初めて文明が始まりました。今から約1万年前であります。まず主要な農産物は米であり小麦であり大麦でありました。さらに様々な野菜や果物を栽培し始める中で、植物のありがたさが分かっていったのでしょ。古代文明には栄養という概念は全く存在しなかったように、病気になった時に美味しくはないのですが、経験的に病気を治してくれる力が苦い植物、つまり薬草にあることを徐々に経験を重ねるうちに知るようになったのです。決してはじめから人類は穀物のように美味しい植物が光合成を行って、炭水化物、脂質、タンパク質の3大栄養素のみならず、その他ミネラルやビタミンを供給してくれるから農耕をやったわけでもなく、さらに穀物のように美味しくはない苦い植物が病気を治してくれることも知っていた訳ではないのです。

ちなみに皆さん、人間の味覚は5種類あることを知っていますか？甘さ、辛さ、酸っぱさ、苦さ、最後に旨味を認識できる味感覚であります。どうして薬草は苦いのかご存知ですか？苦さの元は実は薬草に含まれるアルカロイドという物質なのです。今のところ中断していますが、「どうして漢方薬が免疫を上げるのか」というコラムを書こうとしているかを、私のホームページを読んでおられる皆さんはご存知でしょう。最後の部分が残っているのは、漢方の生薬に含まれるアルカロイドが免疫を上げるということ

を、具体的に詳しく書くことだけなのですが、正確に書こうとすればとっても時間がかかるのです。昔から「良薬口に苦し」と言われるのは、まさに良薬である薬草に苦さの元であるアルカロイドが含まれているからです。

ここでアルカロイドについて簡単に予備知識をまとめておきましょう。本格的な話は「なぜ漢方は免疫を上げるのか」のコラムに最終的に書く予定です。アルカロイドは日本語で植物塩基と訳されます。このアルカロイドは主に高等植物に含まれています。窒素を含む複雑な塩基性の有機化合物の総称であります。一度書いたことがあります、例えば皆さんがよくご存知のニコチン、モルヒネ、コカイン、キニーネ、カフェイン、エフェドリン、クラレなど多数のものが知られています。このような薬用植物の有効成分を競って抽出し単離し始めたのは19世紀半ば頃のヨーロッパの化学者や薬剤師でありました。そして次々と薬用植物からアルカロイドを抽出することによって、何千年も神秘的に包まれていった有効成分を取り出し始めたのであります。この有効成分のほとんどがアルカロイドであったのです。ついでに辛い漢方薬の飲み方を書き添えておきましょう。アルカロイドの苦さを感知する舌はどの部分だと思いますか？苦みを感知する場所は舌の一番奥にあるのです。甘みを感じる味覚の場所は舌の先端ですから、まず口の中に漢方生薬を入れて舌にのせるつもりで入れてから一気に飲み込めば、舌の奥に苦みを感じる味覚の部分を素早く通っていくので苦みを感じることは少なくなるのです。もちろん漢方薬も飲み慣れてしまうと、様々な植物の生薬でできているので、甘みも辛みも旨味も酸っぱさも含まれているので独特な味を満喫できることを請け合います。)

理論

ユナニ医学の基本は、体液病理説であるが、それは「人間の身体には数種類の基本体液があり、その調和によって身体と精神の健康が保たれ、バランスが崩れると病気になる」というものであり、古代ギリシャやインドで唱えられた。(インドで唱えられたのはアーユルヴェーダ医学であったのです。結局、漢方医学もアーユルヴェーダ医学もユナニ医学も同じ考え方であるということがお分かりでしょう。) ユナニ医学はガレノス理論を受け継ぎ、基本体液を4種類とする「四体液説」を採っている。また、人に気質があるのと同様に、食材や生薬にも「熱・冷・湿・乾」の4つの基本性質があると考えられており、患者の気質と食材・生薬の性質を考慮して食餌指導や薬の処方がなされた。(この4つの基本性質も漢方医学の五行に似ていますね。)

ユナニ医学では、身体は次のものから作られているとみなされている。

- ・ 要素（元素）(Arkan)：身体の基本的な構成要素を含む。自然界に存在するものは空
気・火・土・水の四大元素から構成され、ある法則に則って運用されている。
- ・ 気質 (Mizaj)：身体の物理化学的な面を含む。自然界に存在するあらゆるものが気質
を持つ。
- ・ 構成的要素 (Akhlat)：身体の体液を含む。
- ・ 完全に発育し成熟した器官 (A'da)：身体の解剖学を含む。
- ・ 活力または生命力 (Ruh)：活力、生命力。
- ・ 体力 (Quwa)：エネルギー。
- ・ 肉体的な機能 (Af'al)：生化学的な過程を含む身体の生理学を包含する。

これらの内、気質 (Mizaj, マザージュ) が重視され、病理、診断、治療の基礎になっ
ている。人によって優位な体液があり、体液の過少と人の気質には関係があると考えら
れている。(この気質の違いも何によって決められているかをご存知でしょう。遺伝子
であります。もちろん単一の遺伝子ではなくて、23対の染色体にバラまかれた様々な性
質や気質を決める遺伝子の総体によって決まるのです。もちろん現代の遺伝子学では、
どの染色体にどのような気質を決める遺伝子が乗っているかは分かってはいませんが。)

四大元素

詳細は「四大元素」を参照

元素とは一種の単純物質であり、火 (Aatash)、空気 (Hawa)、水 (Aab)、土 (Khaak)
の4つである。空気は風 (Baad) と言われることもある。四大元素は、ユナニ医学の用
語としては、アルカーネ・アルバエー (Arkane-Arbae) とい。火と空気は軽く、水と
土は重い。万物がこの4つの元素によってつくられており、万物の諸性質は、諸物質の
相互反応の結果であるとされる。

4つの基本性質

四大元素は、4つの基本性質「熱・冷・湿・乾」のうち2つを持ち、相互に変換可能であ
ると考えられた。火は熱・乾、空気は熱・湿、水は冷・湿、土は冷・乾の組み合わせで
あり、配合によって強弱がある。ペルシャ語やアラビア語でマザージュ (Mazaj) とい
い、「本質」「気質」「体質」「性質」などを意味する。人間にはそれぞれ気質があり、
体の各器官や部分にも特定の性質がある。人間以外の動植物その各部分にも、特定の性
質があるとされる。また、民族によって、それぞれ生活環境に適した気質を持っている
と考えられた。熱性と冷性はエネルギーの集結（集合）や分離（分散）で、湿性と乾性
は肉体の状態を表すものである。

四体液

詳細は「四体液説」を参照

4つの基本体液は「血液、粘液、黄胆汁、黒胆汁」で、それぞれの量、混合、成熟の度合いなどによって、人間の病気と健康が決まると考えられた。体液にはそれぞれ性質があり、血液は熱性・湿性、粘液は冷性・湿性、黄胆汁は熱性・乾性、黒胆汁は冷性・乾性である。

また、どの体液が優位であるかによって、人の気質は「多血質、粘液質、黄胆汁質（胆汁質）、黒胆汁質（憂鬱質）」の4つに分けられた。

診断

患者の身体の状態や言動、環境が細かく観察され、また体液病理説であるため、体液の状態を知るために、尿検査や便診、脈診、血の状態を見るための瀉血などが行われ、診断材料とされた。

治療

治療の方針は、過剰な力を除去し、不足するところに加えて（逆療法）、過剰な体液を除き、体液のバランスを安定させることである。イブン・スィーナは『医学典範』で、以下の3つの方法を挙げている。（少ないものを補充し、多いものを除去するという考え方は、漢方も同じですね。当然と言えば当然ですが、過小と過剰をどのようにして診断したのでしょうか？）

- ・ 衛生と栄養：「衛生」は体の習慣に基づくもので、健康を保つために守るべき諸注意であり、薬の処方と適合しなければならない。「栄養」については、患者の気質や体液の状態、病気の度合いを念頭におき、食材の性質を考慮して、内容を指導する。食事を禁止したり、量を調整することも行う。（現代の成人病は全て贅沢によって生み出された病気ですから、食事を減らし量も調整するのは今も昔も同じです。糖尿病などは炭水化物の摂り過ぎとカロリーの摂り過ぎですから、炭水化物をやめてカロリーの少ない野菜をたっぷり食べればインシュリン抵抗型のⅡ型糖尿病は全て自分で治せます。糖尿病の治療に医者や薬は全く必要ないのです。）
- ・ 生薬を使った治療：病気の質と反対の質の薬が処方される。医師は、病にかかっている器官の性質および病気の度合いを把握し、患者の性別、年齢、習慣と癖、季

節、地域（環境や気候）、職業、体力や体格に合わせて薬を処方しなければならない。（病気の質や反対の質の薬が何であるかは誰が決めたのでしょうか？経験で決めたという言い方しかできないのです。その経験は誰が保証するのでしょうか？ユナニ医学を作った医者たちが思い込んでいるだけです。アッハッハ！なぜならば病気は免疫と異物の戦いですから、病気を治す時に、病気の質も反対の質の薬も関係ないのです。病気の原因を考え、さらに患者の免疫を上げるだけで、患者自身の免疫が病気を治してくれます。医者は要らないのです。免疫を抑える薬も全く必要ないのです。）

- ・ 身体摩擦法：現代でいうマッサージ、整体、整骨などによる身体調整法で、ファスト（瀉血）なども含まれる。（マッサージや整体整骨の話は語り終えました。上の項のコラムを読んでください。）

イブン・スィーナーは、電気ウナギを使った電気療法、精神療法も行い、音楽療法も積極的に取り入れていた。タクリエ（下痢・嘔吐・瀉血などで悪い体液を排泄する治療）、ヘジャーマツ（吸玉療法）、焼灼術（焼いた鉄製の器具を用いた治療で、中国の鍼灸の影響を受けている）も行われた。（やはりイブン・スィーナーも中国の鍼灸の影響を受けているとはすごいですね。イブン・スィーナーは上で書いたように、別名アビセンナと言われた人であり、『医学典範』を書いた人です。11世紀の人であります。この時代のアラビアと中国との交易が盛んであったことが分かります。）また、イブン・スィーナー『医学典範』の第4巻整骨篇は、サイド・パリッシュ・サーバジューによると、アンブロワーズ・パレ（1510-1590）の外科書の整骨編に多く引用されており、パレを通して日本の整骨技法に影響をあたえたという。

薬剤

アラビア医学を代表する医師イブン・スィーナーは、古代ローマの医師ディオスコリダスの本草書『薬物誌』を基に『医学典範』の薬物に関する巻を著し、約811種の生薬が収録された。ユナニ医学の薬物学は、ギリシャ・ローマの薬物学を受け継いで発展し、インド医学の薬物も多く取り入れている。（11世紀のイブン・スィーナーの時代は、中国のみならずインドとの交流も盛んであったことがうかがえます。）アラビアの薬物書に載せられた薬物は、初めは数百種類であったが、最も充実していると言われるイブン・アルバイタール（1188-1248）の本草書には、2,324の生薬が記載されている。ユナニ医学で使われる生薬の80%は植物性であり、動物性・鉱物性の生薬もある。生薬は単体で用いられる単純薬剤（Mufradat）と、ガレノス製剤と同様に、数種の生薬を混ぜた複合薬剤（Murakkabat）がある。（中国の漢方医学に負けないほどの医学がア

ラビアにもあったにもかかわらず、そしてユナニ医学が確立されたにもかかわらず、なぜユナニ医学が世界医学になりえなかったのでしょうか？その答えはさらに勉強していずれ見つけ出すつもりです。乞うご期待！)

イブン・ズフル (en:Avenzoar, 1091-1162頃) は、薬の調剤は医師ではなく薬剤師が行うべきだと考え、アラブ世界で一般的だった医薬分業を強調した。12世紀のアラビア世界では、調剤業務に関する規則が定められ、薬局の監督官が置かれるなど、薬局制度の基礎が確立された。医学と薬学の法律上の地位を同等とする考えが広まり、薬学の研究が進んだ。(医学と薬学の分業は中国医学には見られませんでした。なぜでしょうか？これもいずれ答えを出すつもりです。)

生薬製剤としては、錠剤、トローチ剤、麝香入り製剤、丸剤、ミロバラン練り薬、消化剤、健胃剤、バラやスマレの保存剤、点眼剤、カルシウムコーティング剤、練り薬の一種、口中で徐々に溶解させる練り薬、蜂蜜入り練り薬、軟膏剤、興奮剤、保存剤、解毒剤、水薬、座薬、歯磨きなどがある。(このような生薬製剤は近代の産物だと思っていましたが、既にユナニ医学で出来上がっていたのですね。このアラブ医学であるユナニ医学がなぜヨーロッパを席卷しなかったのでしょうか？キリスト教とマホメット教の宗教の戦いがこの時代のユナニ医学を西洋に普及することを妨げたのでしょうか？これもいずれ答えを出します。)

薬の性質は、その薬が身体の気質に及ぼす作用によって決められ、患者に投与された時の反応から判断された。「緩和性、熱性、寒性、湿性、乾性、これらの増強型である強熱性、強寒性、混合型である熱乾性、寒乾性」の9種に分けられている。(この薬の性質の分類も中国漢方とほとんど違いはありません。すごいですね。中国医学の分け方よりも、もっと精密ですね。)

緩和性の薬剤を除いた「熱、寒、湿、乾、強熱、強寒、熱乾、寒乾」の性質のものは、体の状況や性質に影響を与える。緩和性を除いた8種類の性質は、強さによって4度に分けられる。

4. 第1度：効果が感じられない程度におだやかで、副作用はない。カモミール (熱性第1度)、スペインカンゾウ (乾性第1度)、スミミザクラ (湿性第1度)、ニオイスマレ (寒性第1度) など。
5. 第2度：効果が体で感じられる程度にあり、副作用はない。サフラン (熱性第2度)、ショウガ (乾性第2度)、ヨザキスイレン (湿性第2度)、レタス (寒性第2度) など。

6. 第3度：第2度より強い効果があり、副作用があっても致命的ではない。カミメボウキ（熱性第3度）、スベリヒユ（寒性第3度）、ブラッククミン（乾性第3度）、ダイダイ（湿性第3度）など。

7. 第4度：第3度より強い効果があり、有毒なものもある。ニンニク（熱性第4度）、ケシ（寒性第4度）、ホオズキ（寒性第4度）、チョウセンアサガオ（乾性第4度）など。（チョウセンアサガオは世界で初めて乳ガンの手術をした華岡青洲が作った麻酔薬である通仙散に含まれているものです。ユナニ医学は本格的に勉強するに価値のある医学であることが分かってきました。やるつもりです。）

このような生薬の性質の分類は、アラビア世界以外でも、中世ヨーロッパの養生書、近世ヨーロッパの本草書で見られ、現在の欧米のハーブ療法でも一部で利用されている

歴史

アラビア世界での発展

ユナニ医学は、ヒポクラテスで知られる古代ギリシャの医学にまで遡る。古代ローマの医師ガレノスがまとめたギリシャ・ローマ医学などの古代ギリシャ・ローマの文化は、ヨーロッパではキリスト教徒の迫害により多くが失われた。6世紀には、ユスティニアヌス帝がアテナイの学園を閉鎖し、学者たちの多くはアラビア世界に亡命し、この地にギリシャ医学をもたらした。ギリシャ医学はアラビアで、世界各地の医学を取り込んで発展した。（ユナニ医学の基本はやはりギリシャ医学であったのです。ギリシャ文明は医学の分野でも非常に大きな影響を及ぼしていることが分かります。にもかかわらず現代のヨーロッパでは免疫を高める生薬医学、薬草医学が完全に途絶えてしまったのはなぜでしょうか？これもいずれ答えを出します。やはり病気を作らなければ、資本主義の本家であるヨーロッパやアメリカの製薬メーカーが儲からないからです。）

ガレノスの業績とそれをまとめたオリバシウス（en: c. 320–400）の著作や、テオフィロス・プロトスパタリオス（en: 7世紀）の中国医学の研究（脈拍の研究、尿検査法の基礎の確立）など、ビザンツ帝国の医学は、サーサーン朝ペルシャのジュンディーシャープール（現在のイラン・フーゼスターン州ゴンディーシャープール）の医学校に受け継がれた。イスラーム拡大後、サーサーン朝の医学はアッバース朝に受け継がれ、さらに知恵の館で、ギリシャ・ローマやペルシャ、エジプト、中国など、さまざまな地域の莫大な医学書・薬学書が翻訳された。中でも『医学問答集』を著したフナイン・イブン・イスハーク（Johannitius, 809–873）は、良質の翻訳を大量に行ったことで名を残している。ジュンディーシャープールではパーレビー語（古代ペルシャ語）に翻訳され、知

恵の館では主に、イスラームの拡大で広範囲で使われるようになったアラビア語に訳された。インド医学の古典『チャラカ・サンヒター』『スシュルタ・サンヒター』も翻訳されており、ユナニ医学にはアーユル・ヴェーダの影響も見られる。（ユナニ医学はちょっと知っていたのですが、ユナニ医学の歴史を勉強すればするほど、アラビア人がどんなに素晴らしい科学者であり、医学者であるかが分かります。ユナニ医学が当然世界医学になるべきであったのになれなかったのはなぜでしょうか？やはり答えを簡単にいえば、近代になってアラブがヨーロッパの植民地国になってしまったためです。ヨーロッパに18世紀のなかばから始まった産業革命によって圧倒的な軍事力、経済力を身につけたヨーロッパに全てを征服されてしまったためです。ちょうど日本が1868年に明治維新を行い、それまでの漢方医学を全否定してしまったのと同じような状況で、アラビアの国々が植民地化されたためにユナニ医学も否定され、かつ西洋文明が全て正しいと思い込んでしまったからです。）

解剖学に関しては、イスラーム文化圏では、宗教的な制約で解剖が行われなかったため、ガレノスの誤りは修正されなかった。外科は宋の解剖学の影響もあったが、ガレノス医学を堅持しほとんど発展しなかった。手術はメスでなく焼灼に使う焼いた鉄の器具で切開を行ったため、術後感染症をおこし、死亡する患者が後を絶たなかった。これは、ユナニ医学を取り入れた中世ヨーロッパでも同様であった。（西洋医学がユナニ医学や漢方医学に勝ったのは、やはり死をもたらず感染症に対する衛生法が、かつ殺菌法が優れていたからです。今も昔も病気は感染症で始まり感染症で終わります。アトピーのリバウンドの治療においても、やはりブドウ球菌感染とレンサ球菌感染を常に念頭に置かねばならないのです。）

翻訳時代以降、10世紀から11世紀にかけて、アラビアでは多くの医学書が書かれた。アリー・アッタバーリーやアル・ラージー（Rhazes, 864-930）などによって、その地方の医学とインドやギリシャの医学が融合し、「ユナニ医学」として親しまれた。さらにイブン・シーナー（Avicenna, 980-1307）は、ガレノスの理論を継承し、時には批判を加えながらも発展させた。研究していたアリストテレスを参考に、ギリシア・アラビアの全知識を包含した、統合的な隙のない医学体系をまとめ上げ、医学書『医学典範』を著した。『医学典範』はアラビア・ヨーロッパの医学に絶大な影響を与えた。アル・ラージーの『アル・マンスール』の書』（医学の簡潔な手引書）や、エジプト出身のユダヤ人イスハーク・アル・イスライーリー（9～10世紀）の『尿の書』（尿診断の基本的なテキスト）も、中世ヨーロッパでよく読まれた。アル・ラージーの医学書は臨床中心、イブン・シーナーは理論中心であったが、どちらも理論と実践の融合を目指している

といえる。アッ・ザフラーウィー (en: Albucasis, 936-1019)が外科を、イブン・ズフル (en: Avenzoar, 1091-1162頃) が食事療法の基礎を築いた。(アル・ラージーにしる、イブン・スィーナールにしる、理論と実践の融合を目指したのですが、その時代の医学では病気の原因が見えないウイルスや細菌であるということも分からない上に、さらにこのウイルスや細菌を殺すのも人間の免疫であるということが分からなかったので、中途半端な経験的哲学的な医学に留まってしまったのです。)

医学と共に錬金術も伝わったアラビア世界では、錬金術の研究によって化学が発展し、薬物の研究が進んだ。また、海上交易が盛んになったため、各地の生薬、香辛料が取り入れられた。イブン・アルバイタール (1188-1248) の本草書などがよく知られる。

ユナニ医学は、現在までイスラーム文化圏に受け継がれており、パキスタンやインド、エジプト、新疆ウイグル自治区などで広く行われている。(やはり後進国であるパキスタンやインドやエジプト、さらに中国に反旗を翻している新疆ウイグルなどでしか、ユナニ医学が実践されていないのは残念です。ユナニ医学は中国医学よりも優れている可能性があります。勉強します。後進国は製薬メーカーの作った薬を買うお金がないので、ユナニ医学が残っているのでしょうか。)

中世ヨーロッパの瀉血

ヨーロッパでは6世紀以降、長く医学が停滞し、中世の医学は主に修道院が担っていた。十字軍でヨーロッパがアラビアと接触すると、アラビアの最新医学は徐々にヨーロッパに取り入れられ、サレルノ医科大学の教師コンスタンティヌス・アフリカヌス (1017-1087) らが、イブン・スィーナールやアル・ラージーの医学書を翻訳した。12世紀には、イタリアなどで大学が設立され、医学部ではアラビアの医学書を教科書として専門教育が行われた。15~16世紀まで、医学部では主にユナニ医学が教えられており、18世紀までイブン・スィーナールの『医学典範』が教科書として使われていた。(中世のヨーロッパではアビセンナの『医学典範』が教科書で使われていたのは合点がいきますが、それが現代では逆転しているのはなぜでしょうか？免疫を抑える薬が一般大衆の病気の不愉快さを一時的に楽にし、さらに使えば使うほど製薬メーカーが儲かるからです。アラブの人にもヨーロッパの人にも、病気を治すのは自分の免疫の遺伝子しかないことを伝える必要があります。この私のホームページを英語で翻訳する必要がありますが、年老いた私には残された時間があまりありません。後継者に任せることになるでしょう。)

ルネサンス以降、16世紀には、アンドレアス・ヴェサリウスがガレノス解剖学の誤りを証明するなど、さまざまな新発見があった。また、19世紀には実験医学が登場し、西洋医学は伝統医学的思考から自然科学へと方向を転じた。しかし、ユナニ医学の基本である体液病理説（四体液説）は、1858年のウィルヒョー（ウィルヒョウ、フィルヒョウ）の細胞病理説まで、ほとんど議論の余地なく受け継がれていた。（ドイツの医学者であるウィルヒョウの細胞病理説がユナニ医学の体液病理説をひっくり返したとは初めて知りました。実はウィルヒョウの細胞病理説も間違っているのです。これについては詳しく後を書くつもりです。）

（今日はここまでです。2014/06/26）

また、西洋近代医学では、治療の分野の発展が最も遅れたため、正規の医療とユナニ医学をベースにした伝統医療や民間療法の治療には、19世紀後半までさほど差がなかった。（医学は病気を持った患者を治すために生まれたにもかかわらず、なぜ西洋近代医学の治療の分野の発展が最も遅れたのでしょうか？今なおいわゆる東洋医学やアーユルヴェーダやユナニ医学と比べて、病気を治すという治療医学においては最も遅れていることは、私のこのホームページを読んでおられる方はお分かりでしょう。ワクチンと抗生物質を除いては逆に免疫を抑えてしまうので新たな病気を作り出していることもお分かりでしょう。

西洋近代医学が治療医学に貢献した分野はたった3つしかないのです。ひとつめはワクチンをつくったこと、2つめは抗生物質を作ったこと、3つめは衛生観念を広めて感染症の原因となるウイルスや細菌を生活環境から排除することに成功したこと、これら3つしかないことは皆さんご存知でしょう。逆に言うと、中国医学にしろアーユルヴェーダにしろユナニ医学にしろ、この3つの分野においては何の貢献もしなかったといえます。というよりも19世紀の後半に西洋医学がワクチンと抗生物質を作り出すまでは、病気になれば死ぬ恐れが常につきまとっていたのです。その頃までは病気と死は同義語であったのです。

それでは西洋近代医学が生まれるまでに、東洋医学やアーユルヴェーダやユナニ医学などは、人類に対してどんな貢献をしてきたといえるのでしょうか？答えはただ一つ、免疫を上げてきたということだけあります。今私がやっている東洋医学も、昔と変わらず今でも免疫を上げているだけなのです。ところが現代の西洋医学でもウイルスを殺

す薬は永遠に作ることができないのです。昔も今も未来もウイルスを殺すことは自分の免疫でしかできないのです。もちろん既にウイルスに対して作ることが可能なワクチンは作りきっています。例えば HIV ウイルスに対するワクチンやヘルペスウイルスに対するワクチンは、果たして今後作ることが可能でしょうか？AIDS を起こす HIV ウイルスに対しては可能性がありますが、ヘルペスウイルスに対するワクチンは全て無駄になるでしょう。なぜでしょうか？説明しましょう。

残念なことに、ヘルペスウイルスだけは自分の免疫で殺すことができないのみならず、免疫を助けるヘルペスに対するワクチンも作ったところで全く無力なのです。というのは、人体に入り込む膨大な種類のウイルスの中で、ただ一つ免疫から逃れるすべを持っているヘルペスを殺すことが絶対に不可能であるからです。なぜならばヘルペスウイルスは免疫が手を出せない神経節に隠れてしまうからです。だからこそ人類は消滅するまでヘルペスと戦わざるをえないのです。従ってヘルペスはあらゆる感染症を引き起こす病原体の中で突出した存在であります。人を殺すことは絶対にできないのでありますが、逆に神なる免疫の遺伝子が作り上げた武器によっても絶対に殺されることがないので、この意味でヘルペスはウイルスの王者といえます。不死身のウイルスがヘルペスウイルスなのです。まるで永遠の疫病神といえます。

人類が発祥して以来ヘルペスウイルスは人類の体に侵入し、神経に住みつき始めてから一度も死に絶えたことがないのです。これから先も神経節に隠れ続け、免疫が弱くなれば増え続け、免疫が強くなれば一部は殺せますが、殺し尽くされる前に神経節に隠れることができるのです。なんと恐ろしい病原体でしょうか。人類はヘルペスに殺されることはないのですが、幸せを奪われ続けるのです。このヘルペスが 21 世紀の最大の敵であることを全世界の医学者達が誰も認めようとしなないことが悲しくて悲しくてなりません。原因不明の病気の 99%はヘルペスであるにもかかわらず、健康保険で抗ヘルペス剤を出すことを認めないのは許せません。ヘルペスとの戦いである様々な神経症状がなくなるまで健康保険で使うことができるようにしてもらいたいのです。漢方はこのウイルスの王者であるヘルペスウイルスとの戦いにおいても、昔も今も未来においても神経節にヘルペスウイルスを追いやるまで免疫を手助けすることをしてきたし、しているし、し続けるでしょうが、抗ヘルペス剤と一緒に使えば人体からヘルペスは激減するのです。)

また、正規の医療は高額であり、権威を笠にきた高圧的な医師が多かった。そのためヨーロッパでは、医師免許を持たない民間の治療者が根強い支持を集めた。ヨーロッパの民間療法・自然療法は、ユナニ医学を受け継いだものも多く、例えば、19 世紀に食餌療法を体系化し、温水による湿布を用いたドイツの自然療法家ヨーハン・シュロート

は、体液病理説に依拠する身体観・疾病観を堅持していた。

次は韓医学についてです

韓医学（かんいがく）とは、伝統中国医学の系譜で、朝鮮半島で使用された医術・薬学を便宜上（後述）呼ぶ、いわゆる呼び名である。韓医方（かんいほう）ともいう。（日本漢方も韓流医学も、元は中国医学であります。中国医学を韓国や日本の漢方医がそれぞれ工夫を重ねて独自の漢方医学をその風土に合わせて少しばかり発展させただけのことです。いずれにしろ彼らも免疫学という概念は何一つ思いつくこともできなかつたのですから、様々な漢方生薬から新たなる組み合わせを考えだして、中国人に見られない患者の症状に対して新たなる漢方処方を見出しただけだといえます。日本の漢方医にしろ韓国の漢方医にしろ、漢方薬の処方を新たに作るのはそれまでの中国の漢方処方が自分たちの国の患者の病気を治せなかつたので、新たに独自の工夫を凝らして今までにない処方の組み合わせを考えだしただけのことです。

ところがその新しい漢方生薬が患者の病気を治すのに効果があるかどうかは、やはり症状が良くなるかどうかで決める以外に方法がなかつたのです。ちょうど現代西洋医学はほとんど全てが症状を取れば良く効く薬だとされるのですが、漢方薬が病気に効くということと、西洋医学の工場で作られた製薬メーカーの薬が効くという意味とは全く違うのです。漢方生薬には免疫を抑える生薬はまるで何一つとしてないのです。ちょうど人間の免疫の遺伝子が敵と戦う時に作り出す免疫のタンパクが絶対に免疫を抑えることがないのと同じです。ところが現代の西洋医学の薬は99%免疫を抑えるために作られている訳ですから、いずれの薬でも症状が消えれば治った治ったと喜ぶわけですが、漢方の方は本当に患者が自分の免疫で病気を治している手助けをしているだけであるのですが、西洋医学の方は免疫を抑えるだけですから、病気は治るどころか、ますます増えていくことになり、とどのつまりは病気を作っていることになるのです。ただ病気と症状は同じだと考えている愚かな一般大衆は、症状がなくなれば病気が治った気にさせられて医者に騙されているだけなのです。漢方医学と現代の免疫を抑えるステロイド医学である西洋医学の違いははっきりお分かりでしょう。（膠原病などはまさに医者作った病気です。）

名称

以前は漢医学（かんいがく）・漢方医学（かんぼういがく）とも呼ばれていたが、大韓民国（韓国）では1986年、民族的なアイデンティティの高まりを受け、漢字表記を「韓医学」と新規に名乗るブームが起き、以降そう呼ばれるようになっただけであり、伝統的な名称ではない。（韓国は地理的にも中国大陸と繋がり、歴史的にも中国に侵略されたり支配されたりしてきたので、その影響から逃れるためにナショナリズムが今もなお強く、漢方医学という名称さえも変えて韓医学と言い換えるようになりました。一方、日本では今なお漢方医学や漢方薬という言葉が使われています。医学の世界では変化が見られませんが、政治の世界では最近日本でも中国に対抗するために大変な状況が起こりつつあります。元来、東洋の中心である中国が本来の力を持ち始めたので、日本もとうとう7月1日をもって中国と戦争できる憲法解釈を可能にしてしまいました。中国と戦っても勝てる訳はないのに、再び戦争のできる国になったところで近い将来に殺し合いの悲劇が繰り返されることが懸念されます。残念です。日本の行く道は本当は東洋のスイスになり、永世中立国を宣言し、世界の2大大国であるアメリカと中国の間を仲介できる国になれるのに残念です。）また古くは半島諸国において東医学（とういがく）・東方医学（とうほういがく）と呼ばれた医学系統があり、朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）では長らくこの呼称を用いていたが、韓国と同様な理由により1993年に「高麗医学」に変更した。広義の韓医学は、古代以来中国より導入され用いられていた漢方医学も含めた、朝鮮半島で行われた医学全体を指す場合もある。（ただし、民俗医療はこれに含まない。）

韓方とは”韓国伝統の医学”を意味しない。（言葉に漢方と韓方があることを知っておいてください。）最近、諸所においてこれらを混同するように書かれることがあるが、韓方とは”韓国方式で作る”という意味でしかなく、故に韓方という単語は”韓国の伝統医学”を意味していない。

韓方とはせいぜい漢方の材料、人参、ヨモギ、薬草など黄土などを韓国の方式に則って作った、という意味でしかなく、韓方が韓国の医学を意味する言葉としては韓国国内ですら使用していない現状に注意したい。つまり、韓方と韓医学とは同じ意味ではなく、病院は韓医院、医者は韓医者という事であり、韓方とは韓国医学を指す言葉ではなく”韓国の”程度の意味でしかない。たとえば韓方料理という場合、韓国医学とは全く関係がない。健康食とされる韓方参鶏湯とはつまり、漢方材料を韓国式（ないしは韓国で・韓国人が・韓国の食材で、程度の意味で）

で調理する、というだけである。韓方食品とはつまり”韓国の方法で調理した”の意味であり医学とは関係がない。

歴史

韓医学は、中国からの影響を受け、朝鮮半島独自の疾病・薬物などを取り入れ発展したと現代の大韓民国は主張するが、三国時代、統一新羅時代、朝鮮半島諸国において実存する書籍は皆無である。唯一、朝鮮半島の医方を伝えているといわれる書に、日本の円融天皇時の永観2年（984年）に丹波康頼の著作『医心方』があるのみである。医心方は、平安時代に当時の中国医学の知恵を中国由来の文献から集大成し、天皇に献上された日本最古の医学書であるが、朝鮮半島の文献を引用したのではないかと思われる箇所が稀少例見られる。（ここで日本漢方の原点である『医心方』と、今なお韓国で韓医学の宝である『東医宝鑑』について [wikipedia](#) からコピペしながら解説しましょう。）

医心方（いしんぼう）とは平安時代の宮中医官である鍼博士丹波康頼撰による日本現存最古の医学書である。（丹波康頼が漢方医学博士ではなくて、鍼博士であったのはなぜだったのでしょうか？別の文献には医博士と書いてありました。結局は漢方と鍼灸は一心同体であるからです。丹波という姓を持っているのは、丹波康頼が現在の京都の丹波にある福知山の出身であったからです。）

全 30 巻、医師の倫理・医学総論・各種疾患に対する療法・保健衛生・養生法・医療技術・医学思想・房中術などから構成される。27 巻分は 12 世紀の平安時代に、1 巻は鎌倉時代に書写され、2 巻と 1 冊は江戸時代の後補である。本文はすべて漢文で書かれており、唐代に存在した膨大な医学書を引用してあり、現在では地上から失われた多くの佚書（いつしょ）を、この医心方から復元することができることから、文献学上非常に重要な書物とされる。漢方医学のみならず、平安・鎌倉時代の送りカナ・ヲコト点がついているため、国語学史・書道史上からも重要視されている。（佚書とは書名だけが文献に残り、実物はその所在が分からないので伝わってはいない書物のことです。この「佚」という字は散佚（さんいつ）の「佚」であり、散佚とはまとまっていた書物や文献などが散り散りになり失われてしまうことです。）

東アジア（特に漢字文化圏）における所謂「古典」というものの扱いは、新しい

書物を為す場合の引用源として使用される。つまり、新しい書物は、古い書群から本文を抜き出してきて、編み直したものであるわけである。

鍼灸医学の書は、明清に至るまで、その殆どが内経などの編み直しと言ってもよい。(内経とは黄帝内経のことです。黄帝内経は鍼灸医学の原点であります。)つまり、由来のわからない文を為すことを忌むのが、東アジアにおける古典の扱いであった。医心方は、この点で非常に優等生的な書と言える。

医心方は、撰者丹波康頼により 984 年(永観 2 年) 朝廷に献上された。これは宮中に納められていたが、1554 年に至り正親町天皇により典薬頭半井(なからい) 家に下賜された。また丹波家においても秘蔵されていたとされるが、これは少なくとも丹波家の末裔である多紀家(半井家と並ぶ江戸幕府の最高医官) においては、幕末までに多くが失われていたとされ、多紀元堅が復元し刷らせている。

(多紀元堅は丹波という姓ではないのですが、丹波康頼の末裔です。) 幕末に、江戸幕府が多紀に校勘(こうかん) させた「医心方」の元本には、半井家に伝わっていたものが使用された。この半井本は、1982 年同家より文化庁に買い上げがあり、1984 年国宝となっている。現在は東京国立博物館が所蔵している。(校勘というのは、古典が印刷された本(肝本) や、古典が写し取られた本(写本) を何冊か比べ合わせて、その誤りを正したり、あるいは相互の異同等を調べて、できるだけその古典の原本の形を再現し、正確な原文の真の意味を探ろうとすることです。)

高麗時代(918~1392) には、特に庶民救済のため、濟危宝・東西大悲院・惠民局が置かれ、現存する朝鮮最古の医学書『郷薬救急方』(高宗時代 13 世紀後半) が編まれた。(高麗という発音から、現在の英語の Korea が生まれ、韓国をさすようになったのです。)

李氏朝鮮時代(1392~1910、27 代続き、519 年後の 1910 年に日本に滅ぼされた) において一般的に韓医学の恩恵に浴する事ができたのは王族・両班(やんばん) (高麗王朝や朝鮮王朝の特権身分を持っていた官僚階級のことであり、行政を司る文班と軍事を司る武班のふたつの官僚階級という意味で両班(やんばん) と呼ばれました。) と中人階級だけであり、一般庶民はもちろん一部の両班(王族も含む) の間でも鬼神信仰にもとづく朝鮮独自の民俗医療が行われていた。李氏朝鮮時代(1392~1910) では、太宗の時に医女制度が創始され、世宗(1418~1450) まで王様であった人で、この 15 世紀前半の世宗が、韓国へ行かれた皆さんがご存

知のようにハングル文字（訓民正音）という文字を作りました。）の時には『郷薬集成方』と『医方類聚』が編集されたが、燕山君時代に入ると衰退し、中宗時代に入ると明医学そのものにとって代われ韓医学は完全に廃れてしまう。（『郷薬集成方』の郷薬は、朝鮮の風土で育てた漢方薬のことです。つまり、中国の明の国から輸入されたものではない漢方薬のことです。）女真族の侵入や日本との軋轢などにより、明薬の輸入が不安定な時代が続くと明医学の持続が困難になり、韓医学が再び復活するが明医学の強い影響を受けている。宣祖の時代になると、許浚によって評価の高い『東医宝鑑』が編纂され、許任の鍼灸法や舎巖道人の新しい鍼灸補瀉法が創始された。19世紀になると、より実証的で科学的な医学が生まれ、李濟馬の『東医寿世保元』（1894年）からは、人間の体質を太陽人、太陰人、少陽人、少陰人に分ける四象医学が創始された。朝鮮では、許浚・舎巖道人・李濟馬が朝鮮時代の三大医学者とされている。（ここで『東医宝鑑』を書いた許浚について勉強しましょう。）

東医宝鑑（とういほうかん、東醫寶鑑、トンイボガム）は、李氏朝鮮時代の医書。23編 25巻。許浚著。（1539～1615）1613年に刊行され、朝鮮第一の医書として評価が高く、中国・日本を含めて広く流布した。（許浚については、韓流ドラマ『ホジュン 宮廷医官への道』で良くご存知でしょう。許浚の韓国語読みが「ホジュン」であります。日本語読みは「きょしゅん」であります。）

初版本は光海君の1613年に発行され、重版が重ねられている。日本においては享保9年（1724年）に日本版が刊行されており、寛政11年（1799年）にも再版本が刊行されている。中国においては乾隆28年（1763年）に乾隆版本が刊行されており、光緒16年（1890年）に日本再版本を元とした復刻本が出ている。（『東医宝鑑』が日本版のみならず中国版にも翻訳されたのは、この医学書がいかに素晴らしい書物であったかを証明するものです。）

2009年、ユネスコが主催する世界記録遺産にも登録された。（『東医宝鑑』はユネスコの世界記録遺産にも登録されたことも、歴史的に極めて重要な医学書であったことを示すものです。今この漢方医学書は、現在も韓国のみならず日本でも利用されています。私も参考にすることがあります。）

編纂の背景

中宗時代より明の李朱医学が取り入れられ、従来の朝鮮医学は忘れ去られており、薬ま

でも全て中国に依存する状況にあったが、明医学では朝鮮半島固有の環境・病理に適さない部分があったため、これらの明医学を基礎とし、従来の朝鮮医学との統合作業の必要に迫られていた。また、日本や後金（清）の侵入が度重なり、明薬の輸入が困難になったため、忘れ去られていた朝鮮独特の薬である郷薬の復活が必須になっていた。（日本の侵入というのは、豊臣秀吉の朝鮮侵略のことです。）

1596年、宣祖の王命により、内医院に編纂局を置き、許浚・楊礼寿・李命源・鄭碯・金応鐸・鄭礼男らが朝鮮独自の医学に基づく医学書の作成に乗り出したが、翌年の1597年、丁酉再乱（慶長の役）（この慶長の役というのが豊臣秀吉の朝鮮侵略のことです。豊臣秀吉は2回朝鮮を侵略しました。日本の歴史では1回目を文禄の役といますが、韓国では壬辰（じんしん）の倭乱といい、1592年から1593年まで続きました。2回目の侵略を慶長の役といい、韓国では丁酉（ていゆう）の倭乱といます。はじめは朝鮮側の武力不足と派閥争いなどや、かつ日本軍の鉄砲の優勢で、日本軍が優位に立ちましたが、日本水軍が李舜臣によって完敗させられたり、朝鮮農民の強い抵抗と、かつ明の援助によって敗退し、最後は秀吉の死によって中止されました。朝鮮も明も日本の朝鮮侵略によって大きな打撃を受けたのです。）の勃発により編纂作業は中断された。しかし、許浚が自身の一生をかけた仕事として著述に臨み、14年の歳月を経て、1610年に完成した。1613年、『東医宝鑑』という名で刊行された。

内容

明の李朱医学を基礎とし、朝鮮独自の医学を存分に織り込んでいる。また道教の影響を色濃く受けている。これは、許浚の思想の影響が強いと言われている。また理論より実用性を重んじている所が、以前の医書と異なる面である。

参考にしたとされる本としては、明の李梴による『医学入門』、元の朱震享の著を元に明の程充が編纂した『丹溪心法』、明の虞搏撰の『医学正伝』、明の龔信原（龔は龍の下に共）の『古今医監』、その息子、廷賢の『万病回春』、元の危亦林編の『得效方』、宋代の『聖濟総録』、宋の楊士瀛の『直指法』、宋の王惟一の『銅人経』、明代（著者不明）の『東垣十書』、宋代の『証類本草』、朝鮮の世宗期に編纂された書物『郷薬集成方』、明宗期の楊礼寿の『医林撮要』などが挙げられる。世宗期には朝鮮医学の書として『郷薬集成方』の他に『医方類聚』が編纂されているが、この時期にはほとんど亡逸しており参考にした形跡は見られない。全編は、全25巻で構成されており、序2巻、内景篇4巻、外形篇4巻、雑病編11巻、湯液編3巻、鍼灸編1巻で構成されている。

（韓国の許浚が編集した『東医宝鑑』であります。その種本はほとんど全てが中国の漢方医学書からであることがお分かりでしょう。韓国も自分の国の医学を韓

医学と名付けていますが、中国医学から逃れることができないのです。それは日本についても同じことがいえます。中国は1840年のアヘン戦争をキッカケとして、世界の列強の植民地になりかけ始めました。第2次世界大戦が終わる頃までの約150年間は混乱の極みに落とし込まれました。第2次世界大戦後、毛沢東によって中国は統一されて共産主義国になったのですが、やはり共産主義では飯が食えずに起死回生のために鄧小平の開国開放路線が始まりました。1979年から国家資本主義を始めたのです。現代はそれからまだ30年そこそこしか経っていません。しかし今年のGDPはアメリカを勝ろうとせんばかりです。歴史的・文明的・国土の大きさ・人口の多さ・漢民族の優秀さから見て、再び中国が世界をリードするのは当たり前のことです。従って現在の中国の共産党の権力者が自国の経済力に相応しい軍事力を持つのは当然のことだと考えているのは道理であります。

にもかかわらず、中国に負けまいとして、そのような国と戦争できる準備をしつつある日本の総理は何を考えているのでしょうか？日本が中国を侵略した過去の中国とは全く違った本来の中国に戻りつつあることを、我が国の首相はまるで認識していないようです。残念です。人口比だけでも13億対1億であり、しかもますます興隆していく中国と財政赤字が1100兆円を超える衰退していく日本が戦ってどちらが勝つと思いますか？結果は火を見るより明らかであります。日本はアメリカの手先になってはいけません。仮に中国とアメリカが戦争をし始めても結局は主戦場になるのは日本です。アメリカの本土で戦争が行われることは決してないのです。安倍総理に聞きたいのです。仮に日本がアメリカの差し金で中国と戦って勝てると思いますか？と。どうしてもせざるをえない戦争は勝てるならばやればいいでしょうが、中国に勝てる訳はないのです。いずれにしろ絶対に戦争は二度と起こしてはならないのです。2014年7月1日は、第3次世界大戦への記念すべき日になるかもしれません。悲しいことです。まさに歴史は繰り返されるといふ諺どおりにならないことを祈るしかありません。)

李氏朝鮮後期から末期に入ると韓医学は衰退の一途をたどり、開国後は西洋医学の流入により完全に衰滅し、朝鮮半島において韓医学（特に李氏朝鮮前期）の多くの古医書が逸失している。しかしながら、大韓民国の時代に至り、再び脚光を浴び、多くの韓方医院などが作られ復権している反面、その多くは中医学と区別することが難しいのが実情である。（結局は韓医学も漢方医学も同じものなのです。ちょうど日本漢方医学も中国の漢方医学と同じであり、病気を治す医学はひ

とつなのです。西洋医学も漢方医学もないのです。あるのは38億年かけて出来上がった人間の免疫の遺伝子の命令にのっとった医学しかないのです。その医学をあえて命名すれば免疫遺伝子医学というべきです。正しい医学、つまり病気を治せる医学は免疫遺伝子医学しかないのです。）

2008年6月18日、大韓韓方医協会は「WHOの“鍼灸経穴部位の国際標準”に韓国の鍼術方法が採択された」と発表した。この発表は国際問題化し、WHOと中国が反発、WHOが韓国にかわり中国に謝罪した。（韓国も日本と同じく、中国に負けたくないのこのような過ちを犯したのです。韓国も日本も北朝鮮も中国に勝てる訳はないのです。金があり軍事力があり強くて賢い人には頭を下げる以外にないのです。今の日本がアメリカに対して取り続けている態度です。とりわけ中国人は古来から中国を漢族が支配し始めてから優れた文化力や軍事力や経済力をもって周囲の文化的に遅れた各民族に対して自らを世界の中央に位置する文化大国家であるという意識を持ってきました。つまり中華思想です。彼らは周りの文化の遅れた国を支配するというよりも、周りの弱小な文化的に遅れた民族から入貢貿易といって外国からの使者が貢ぎ物を持って中国の朝廷に伺う時に頭を下げてくれれば納得するというメンツを重んずる国であります。つまり対面を重んずる国であり、自分の国が周りの国よりも優れているということを相手に認めさせることが中華思想の根本であります。

もちろん現在は中華思想で世界が動いている訳ではありませんし、動かすこともできません。やはり資本主義の世の中ですから金が全てであります。なぜならば軍事力を支えるのは金であるからです。アメリカは財政赤字はGDPの110%といわれます。日本の財政赤字はGDPの210%といわれます。中国はまだ財政赤字はたったの20%しかありません。冷戦終了後アメリカは好きなように世界を牛耳ってきました。しかしながら、イラク戦争、アフガン戦争で何百兆円も無駄な金を使いだんだんお金が続かなくなってきました。イラク戦争が終わった後にアメリカ軍を撤退させたのですが、再びイラクが内戦状態になりつつあります。一方、中国は再びオバマがアラブに本格的に手を出すことを望んでいます。なぜならばアラブにアメリカがちょっかいを出し続ければ出し続けるほど、相対的に中国の力が強くなるからです。

日本はアメリカの対中国包囲網の先頭に立ち、東南アジアの国々を中国から引き離そうとしていますが、結局は東南アジア自体が中国の影響から抜け出すことはできないので、いずれは失敗するでしょう。というのは、とどのつまりは日本

は自国で作ったものを外国に売ってしか繁栄することは無理なのです。だからこそアベノミクスを考えだして、アメリカに頼んで円安にしてもらったのでしょうか。13 億を超える中国の消費大国に物が売れなくなったらどうなるのでしょうか？以前のようにアメリカが代わりに日本の車をどんどん買ってくれますか？しかも東南アジアの発展途上国も、日本から物を買う以上に、日本に売ろうとしてきます。ますます世界中の国同士の競争が激しくなってきます。

安倍さん、あなたは本当に中国の歴史を深く考えたことがありますか？と聞きたいぐらいです。素直に中国のすごさを認めるべきなのです。ここ 200 年近くもの長い間、中国は「眠れる獅子」とか「死んだ獅子」とかいわれてきましたが、共産主義をやめて国家社会主義を始めてたった 30 年間で中国は眠りから覚めた途端に、日本を追い越して世界第 2 の経済大国にのしあがったのです。中国はやっと本来の中国を取り戻すことができつつあるのです。

イギリスの有名なスタンダードチャータード銀行による 2030 年度の国家別 GDP の額の比較によれば、中国の GDP は世界第 1 位になり、5380 兆円になります。第 2 位はアメリカで 3850 兆円、日本は第 4 位で 930 兆円となるのです。第 3 位はどこだと思いますか？インドです。1500 兆円になります。第 5 位はドイツで 740 兆円であります。ついでに第 6 位はブラジルであり 630 兆円、第 7 位はイギリスで 580 兆円、第 8 位はフランスで 570 兆円、第 9 位はインドネシアで 470 兆円、第 10 位はロシアで 460 兆円となります。2030 年には 1 位の中国は 3 位の日本の 6 倍近くの GDP を生み出すこととなります。こんな国と戦争をして勝てると思いますか？2030 年というのは、今からたった 16 年後なんですよ。おそらくアメリカと中国が戦争をしても、アメリカが負けることになるでしょう。)

このコラムはここまでです。2014/07/03